

アート活動を通じた“共に生きる社会”の創造：九州大学ソーシャルアートラボ アートマネジメント人材育成事業：平成30年度活動報告書

中村，美亜

九州大学大学院芸術工学研究院コミュニケーションデザイン科学部門：准教授

長津，結一郎

九州大学大学院芸術工学研究院コミュニケーションデザイン科学部門：准教授

村谷，つかさ

九州大学大学院芸術工学研究院：学術研究員

木下，貴子

他

<https://hdl.handle.net/2324/7157412>

出版情報：2019-03-29. Social Art Lab, affiliated with the Faculty of Design, Kyushu University
バージョン：

権利関係：©2019九州大学ソーシャルアートラボ

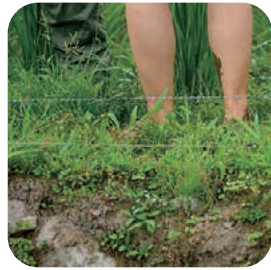
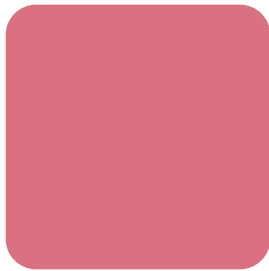




九州大学ソーシャルアートラボ
アートマネジメント人材育成事業
平成30年度活動報告書

アート活動を通した
“共に生きる社会”の創造

Social Art Lab 2018





Contents

ごあいさつ.....2

平成30年度のアートマネジメント
人材育成グループ事業について.....3

九州大学ソーシャルアートラボの概要4

実践講座
九州北部豪雨災害復興支援プロジェクト.....6

「演劇と社会包摂」制作実践講座 14

奥八女芸農プロジェクト 22

公開講座 30

教材開発 40

公開ディスカッション 45

平成30年度事業フライヤー 覧..... 46

メディア掲載..... 47

おわりに 48

1

2

3

4

5

6

7

表紙写真撮影
1、4、6、7＝富永 亜紀子
2＝認定NPO法人ニコちゃんの会
3、5＝長野 聡史

ごあいさつ

平成27年度に大学院芸術工学研究院に設置されたソーシャルアートラボ（SAL）は、社会の課題にコミットし、人間どうしの新しいつながりを生み出す芸術実践を「ソーシャルアート」と捉え、その研究・教育・実践・提言を通じて、新しい生の価値を提示していくことを目的としています。

SALのアートマネジメント人材育成グループは、平成30年度から、文化庁「大学における文化芸術推進事業」の助成を受けて、さまざまな講座を開講しています。「社会包摂に資する共創的芸術活動のデザインと人材育成プログラムの構築」と題するこの事業は、①調査研究を通じた教材開発（知見の体系化）、②実践的な教育機会の提供（ノウハウの体系化）、③周知・普及（ネットワーキング）の3つを往還的に実施し、2020年以降の社会で文化芸術を牽引するアートマネジメント人材の育成法を確立することを目指しています。

この報告書は、SALのアートマネジメント人材育成グループの平成30年度の活動を記録したものです。まず3つの地域で現場からの学びのあり方を模索した実践講座についてご報告いたします。続いて公開講座、さらには文化庁「文化庁と大学・研究機関等との共同研究事業」と連携して実施した教材開発についてもご報告いたします。

本事業への助成を賜りました文化庁、共催団体としてご支援いただいた公益財団法人福岡市文化芸術振興財団、そして本事業にご協力いただいた皆さまに、この場を借りて御礼申し上げます。

平成31年3月
九州大学大学院芸術工学研究院・研究院長
谷 正和

九州大学ソーシャルアートラボ（SAL） 平成30年度のアートマネジメント人材育成グループ事業について

中村 美亜（SAL教員・副ラボ長）

東西冷戦の終結以降、世界各国で多様な人たちとの共生が大きなテーマとなっています。芸術の分野では、障害・貧困・外国人・高齢者などの理由から社会で排除されていた人たちが、表現活動を通して自信を獲得し自分の能力を発揮できるようになった例や、多様な人たちが共に創造活動を行うことで相互の関係が深まった例が報告されるようになりました。日本では2011年2月に〈文化芸術の振興に関する基本的な方針（第3次）〉が閣議決定され、社会包摂を意識した芸術活動が推進されるようになりました。

しかし日本の現状を見てみると、マイノリティに表現の機会を与えることで満足している、あるいは、マジョリティの活動にマイノリティが参加できるようにすること自体を目標としている例も少なくないようです。少しずつ前進しているとはいえませんが、これだけではマイノリティがエンパワメントされることも、多様な人たちどうしの相互関係が深まることもあまり期待できそうにありません。それでは、社会包摂につながる共創的芸術活動を実践するためには、何が必要なのでしょう。

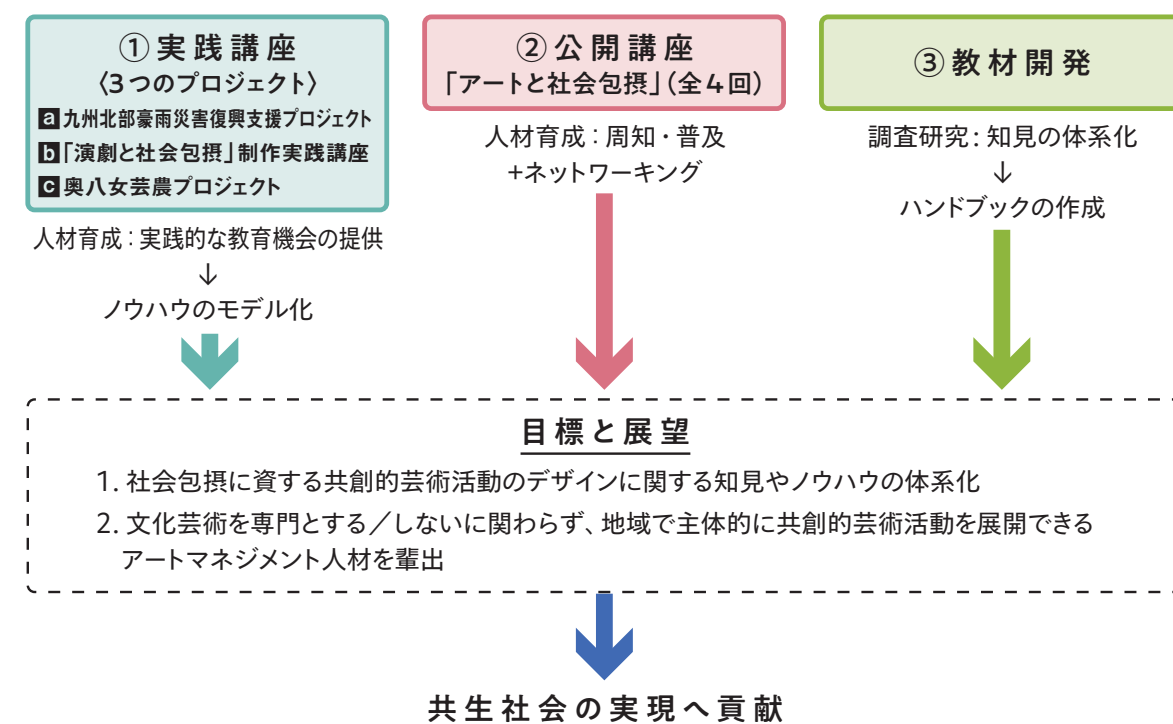
この問いに答えるため、九州大学ソーシャルアートラボのアートマネジメント人材育成グループは、①実践を通してより良い人材育成の方法を模索する3つの実践講座、②多種多様な社会包摂に関する事例を広く紹介する公開講座、③人材育成のための教材開発を実施することにしました。

①実践講座では、(a) 平成29年7月九州北部豪雨で大きな被害を受けた山里の美術館「共星の里」（福岡県朝倉市黒川）における九州北部豪雨災害復興支援プロジェクト「黒川復興ガーデンとバイオアート」、(b) 福岡市内で重い病気や障害のある人たちの支援を行っている認定NPO法人ニコちゃんの会との「演劇と社会包摂」実践講座、(c) 特例認定NPO法人山村塾と協働で行われた、平成24年7月九州北部豪雨で災害に見舞われた福岡県八女市黒木町笠原地区での「奥八女芸農プロジェクト」を行いました。

②公開講座では、障害のある人のアート活動に関するドキュメンタリー映像鑑賞会、香港の大規模福祉施設におけるユニークな芸術の取り組みの紹介、「障害」という枠に捉われないアウトサイダーアートの最前線に関するトークイベント、サンフランシスコの「ガーデンプロジェクト」と呼ばれる包摂的な農作業活動の写真展などを開催しました。

③教材開発では、調査研究を実施したうえで、公共政策に関わる人を対象とし、社会包摂につながる芸術活動に関する基本的な考え方を記したハンドブック作成を行いました。

いずれのプロジェクトも3年で目標が達成されるよう計画されており、最初の年にあたる平成30年度は「現状の把握と課題に関する状況整理」と位置づけられています。本報告書は、以上の活動の報告となります。



九州大学ソーシャルアートラボの概要

ソーシャルアートラボは、2015年4月に九州大学大学院芸術工学研究院の附属組織として誕生し、さまざまな活動を展開しています。

理念

社会の課題にコミットし、人間どうしの新しいつながりを生み出す芸術実践を「ソーシャルアート」と捉え、その研究・教育・実践・提言を通じて、新しい「生」の価値を提示していくことを目的としています*。「アート」を美術分野に限定せず、広義の芸術を示す総称として用い、作品という側面だけでなく実践の側面も重視しながら、環境デザイン、テクノロジー、マネジメントの観点からの総合的アプローチを試みています。

*英語では、socially engaged art, social practice art などと呼ばれます。

背景

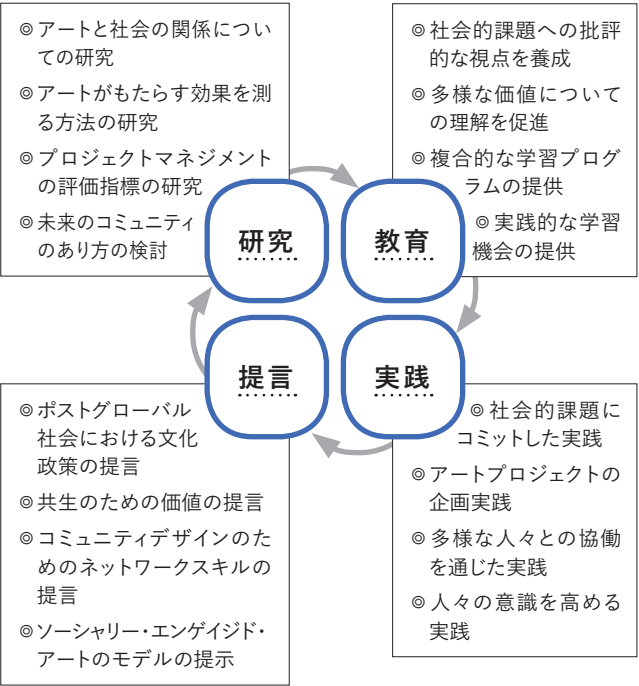
近代以降、技術に裏打ちされた表現としてのアートは、宗教的呪縛から逃れるため、伝統的な共同体社会規範から解放されるため、政治や商業主義から一線を画すため、個人の内面に関わる、社会生活から自律したものとして存在してきました。しかし、理性と感性、公と私が切り離され、科学のみでは解決されない社会的課題が山積する今日においては、むしろ人間の内面と外の世界の行き来を可能にするものとして、人と人の関係性を再構築するものとしてアートが必要とされています。

指針

「“面白い”を形にし、“豊かさ”を見える化する」をキャッチフレーズに、さまざまな異なるものどうしのデモクラティック（民主的）な交流を通して、ポストグローバル時代を見据えた社会のデザインを考案することを目指しています。

ミッション

科学と理性だけでは解決困難な社会的課題に対して、アートを用いて解決へと導く方法に関する研究・教育・実践・提言を、学際的共同作業を通じて行い、つねに学内外での研究成果に基づく教育・実践・提言という流れを意識し、社会的実装を目指します。作品制作やイベント運営においては、単にイベントを実施するだけでなく、記録・編集を含めた一連の流れを意識することで、研究成果への還元や広報発信に注力しています。



主な事業実績

- ◎平成27～29年度 文化庁「大学を活用した文化芸術推進事業」
- ◎平成29年度～ 文化庁「文化庁と大学・研究機関等との共同研究事業〈文化芸術による社会包摂の在り方に関する研究〉」
- ◎平成30年度～ 文化庁「大学における文化芸術推進事業」
- ◎平成30年度～ 日本財団「海と日本PROJECT」

書籍

『ソーシャルアートラボ——地域と社会をひらく』

九州大学ソーシャルアートラボ 編

平成27～29年度事業の総括として、ラボに関わった大学内外の研究者、アーティストなど18人による論考、エッセイ、インタビューをまとめ、書籍化しました。

2018年7月18日初版発行
A5版、240ページ
水曜社 2,500円+税

実践講座

撮影：カシア

九州北部豪雨災害復興支援プロジェクト

黒川復興ガーデンと バイオアート

ひこさんしゅげんどう
—英彦山修験道と禅に習う—

共催：共星の里、（有）杉岡製材所

現地研修「復興支援のための視察研修」

7月1日（日）

講義とワークショップ「復興の庭 創造のための学びと実践」

10月26日（金）

「復興支援のためのアートの企画提案・ブレインストーミング」

11月10日（土）



アートを通じた復興支援——九州大学ソーシャルアートラボでは、平成28年度に「熊本震災に関わるアート：板倉の家小さいおうちプロジェクト」[旧・ちいさいおうち（板倉小屋）プロジェクト]、平成29年度に「九州北部豪雨災害に関わるアート：災害流木再生プロジェクト」と、災害復興のアートプロジェクトに携わってきました。

平成30年度よりスタートした九州北部豪雨災害復興支援プロジェクト「黒川復興ガーデンとバイオアート—英彦山修験道と禅に習う—」は、平成29年7月九州北部豪雨の被災地の方々と環境に寄り添い、復興に寄与することを目指し、朝倉市黒川にある廃校利用の美術館「共星の里」の野外スペースに復興ガーデンを制作するプロジェクトです。一般公募からの参加者（受講生）に「復興の庭 創造」のアイデアを出してもらいながら進めていく実践講座の形を取っており、できあがる庭園（形としての成果物）もさることながら、「できあがっていくまでのプロセスで、受講生が何を学ぶか」という人材育成の側面を重要視しています。

平成30年度は、現地視察研修、講演会・ワークショップ、ブレインストーミングと、実践講座を重ねてまいりました。これら3つの実践講座から出てきたアイデアは、次年度より具体的に動き始める庭園づくりの大きな原動力となることでしょう。

平成30年度は、現地視察研修、講演会・ワークショップ、ブレインストーミングと、実践講座を重ねてまいりました。これら3つの実践講座から出てきたアイデアは、次年度より具体的に動き始める庭園づくりの大きな原動力となることでしょう。

平成28年度

熊本震災に関わるアート

板倉の家小さいおうちプロジェクト

主催：西原村商工会議所（藤本誠一）

平成28年4月に発生し、熊本・大分に甚大な被害をもたらした熊本地震では、度重なる余震の中、被災地では避難所やテント生活、車中泊をやむなく続ける人々が少なくありませんでした。このような状況をうけて、本プロジェクトは始動しました。自宅敷地内に避難用の板倉家屋を建てるという方法を提案し、同年6月には熊本県阿蘇郡西原村に「小さいおうち」を建て、ワークショップを開催。同年10月より「板倉建築による復興住宅」の提案とその生産体制の整備プロジェクトを進めています。



平成29年度

九州北部豪雨災害に関わるアート
災害流木再生プロジェクト

主催：九州大学大学院芸術工学研究院

平成29年7月九州北部豪雨の災害直後より、九州大学では異分野の研究者が結束し、「九州北部豪雨災害調査・復旧復興支援団」として被害の調査や復旧に取り組みました。芸術工学研究院では、建築やデザイン、アートを中心にした「災害流木再生プロジェクト」として、九州北部豪雨災害被災地（福岡県朝倉市、東峰村、添田町、大分県日田市）にて「公共施設等の看板制作」「家具作り、グライダーワークショップ」「彫刻、しおり作り、時計ワークショップ」の3つのプログラムを開催しました。



朝倉の小学校に寄贈された流木の彫刻《朝倉龍》（知足美加子作）

現地研修 「復興支援のための視察研修」

7月1日(日)

「昨日とつながらない今日」を生きる被災地の方々や環境に寄り添いながら、共に創造するアートの中で、私たちは前を向くことができるでしょうか。そのためにまず「現場」に立ち、感じることから始めたいと思いました。「黒川復興ガーデンとパイオアートー英彦山修験道と禅に習うー」の始動にあたり、プレ企画として、九州北部豪雨災害被災地の状況を視察する研修を行いました。現場を見て、地元の声を聞くフィールドワーク。メディアの画面越しでは分からないことを、たくさん発見し、肌で感じました。

参加者：18名
集合：8:30 西鉄筑紫駅西口／9:10 道の駅 三連水車の里あさくら
解散：16:50 道の駅 三連水車の里あさくら／17:30 西鉄筑紫駅西口
参加費：無料（昼食代および集合場所までの交通費は各自実費負担）
災害状況説明：柳 和暢（共星の里アートディレクター）、
尾藤 悦子（共星の里ゼネラルマネージャー）、
杉岡 世邦（有杉岡製材所代表取締役社長）、
櫻木 和弘（三連水車の里あさくら取締役館長）
コーディネーター：知足 美加子（SAL 教員）
スタッフ：中村 美亜（SAL 教員）、白水 祐樹・村谷 つかさ（SAL スタッフ）、
清水 淳史・町野 陽子・佐藤 竜紀・藤田 恭輔（九州大学芸術工学部復興支援隊）
映像記録：西村 翼（九州大学大学院芸術工学府）



1. 災害流木集積所
豪雨によって大規模な山林崩壊がもたらされ、約21万トンの流木が生じました。現在、そのほとんどはバイオマス化しています。



3. 共星の里 黒川INN美術館

廃校になった小学校の校舎を再利用したアート施設。美術家の柳和暢さんが中心となり運営を行っています。「復興ガーデン」は、この野外スペースを舞台に考案されます。豪雨の際、押し寄せた岩石や流木を生かしてアート空間を創造するプロジェクトへとつながります。



4. 杉岡製材所

杉に精通する現代の木挽・杉岡世邦さん（九州大学大学院博士後期課程在籍）が運営しています。板倉構法による熊本震災支援に携わるなか（P7参照）、松末地区に所有する森が甚大な被害を受けました。流木をレスキューする活動も行っています。



6. 旧朝倉市立松末小学校

松末は最も苛烈な豪雨災害に見舞われた地域のひとつです。松末小学校は、最上階に避難した子どもたちや地域住民の命を守りました。開校144年の松末小学校、久喜宮小学校、志波小学校は各地域の精神的支柱でしたが、2018年に杷木小学校に統廃合されました。

撮影：★=渭東 節江 ♥=西村 翼

講義とワークショップ 「復興の庭 創造のための学びと実践」

10月26日(金)

受講生の皆さんは造園のプロではありません。まず午前中は、庭園デザイナーとして国内外から高く評価されている枡野俊明先生に「禅の庭の根本概念」についてご講演いただきました。ワークショップは午後より開始。朝倉市杷木にある円清寺のご住職・淵上良仙先生のご指導のもと、庭づくりのアイデアを出し合いました。各グループ内でディスカッションを進め、模索しながら、被災地でアートを実施する意義を追求していきました。各グループでまとめたアイデアとともに、豪雨で被災された方々への祈りの気持ちを込めた思いが発表されました。

参加者：15名 場所：共星の里 黒川INN美術館
時間：10:30～15:00（講演会 10:30～12:00、ワークショップ 13:00～15:00）
集合：8:40 西鉄筑紫駅西口／9:30 道の駅 三連水車の里あさくら
解散：16:30 道の駅 三連水車の里あさくら／17:20 西鉄筑紫駅西口
参加費：500円（共星の里 黒川INN 美術館の入館料として）
災害状況説明：柳 和暢（共星の里アートディレクター）、
尾藤 悦子（共星の里ゼネラルマネージャー）
コーディネーター：知足 美加子（SAL 教員）
スタッフ：中村 美亜（SAL 教員）、白水 祐樹（SAL スタッフ）
映像記録：園田 裕美
後援：朝倉市、九州大学復興支援団

講演会「禅の庭の根本概念」

枡野先生からは最初に、仏教では「ともいき」という言葉が昔からあることが伝えられました。「現代では共生と読みかえておりますが、人間も自然とともにある、人間も自然のなかの一員であるというふうに仏教では考えるのです。その自然と一体となって、共に生かされていることを感じながら、感謝しながら生きていくことが基本なのです」と語ります。

本題では、西洋と日本における美意識の違いについて広場や建築などの事例をあげて説明され、さらにフラワーアレンジメントと生け花、西洋の磁器と日本の茶碗の違いを例に、禅的な美とは何かについて説明されました。

「何を美しいとするのか」という禅の庭の美や「自然（じねん）」についてお話しされたり、また、「石心（いしごころ）を読む」という言葉を使いながら石をよく観察し対話することの大切さを説かれたりしました。自然と心、そして美について、実践者としての真実の響きある言葉が、受講生たちに深く届きました。



講師プロフィール

枡野 俊明(ますの しゅんみょう)
曹洞宗徳雄山建功寺住職
多摩美術大学環境デザイン学科教授、庭園デザイナー
大学卒業後、大本山總持寺で修行。禅の思想と日本の伝統文化に根差した「禅の庭」の創作活動を行い、国内外から高い評価を得る。芸術選奨文部大臣新人賞を庭園デザイナーとして初受賞、ドイツ連邦共和国功勳勲章功勞十字綬章を受章。庭園デザイナーとしての主な作品に、カナダ大使館、セルリアンタワー東急ホテル庭園、ベルリン日本庭園など。主な著書に『禅、シンプル生活のすすめ』『心配事の9割は起こらない』などがある。

ワークショップ「黒川復興ガーデン作庭にむけて」

受講生のつづやき



共星の里の周辺の集落は、豪雨の前と後とで、居住世帯数はどう変わったのだろうか？ 今、何世帯が住んでいらっしゃるのか？



仮設住宅の滞在期限が2019年の夏で切れると聞いているが、その後、どれだけの世帯がこの集落へ戻って来られるのだろうか？

故郷に住みたくても住めない方々が、時々でもここへ戻って来て心を癒すことができたり、離れていてもつながりを感じられたりするには、どうしたらよいだろう？ そのために、この庭園を生かせないだろうか？



撮影 (P10-11) : ★=長野 聡史

講師プロフィール

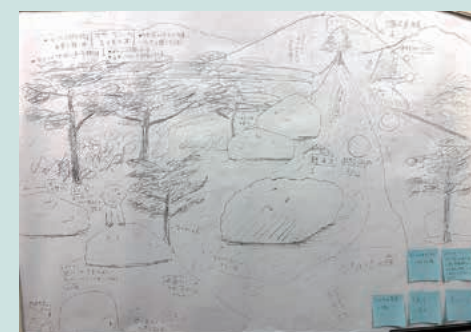
淵上 良仙
(ふちがみ りょうせん)
龍光山円清寺住職
1984年駒澤大学仏教学部・仏教学科卒業。曹洞宗大本山永平寺にて修行後、社会福祉士、介護福祉士、介護支援専門員として老人福祉の現場にて奉職する。2005年より福岡県朝倉市円清寺25世住職。写経会、坐禅会などを通じて、「親しみやすいお寺」をモットーに教化布教に精進している。



4つのグループに分かれてまとめたアイデア

Points

- ◎子どもたちが遊べる空間を作る
- ◎地形に起伏を与える
- ◎コミュニケーションの場にする
- ◎防災意識をつなぐための教訓とする



上空から見ると「心」の字の形になるよう岩を並べ、あえて一箇所だけ不安定な岩を残して防災意識をつなぐための教訓としたい。

水を引いて流れをつくり、近隣の人が気軽に畑の芋を洗う等で立ち寄れるようなコミュニケーションの場にしたい。



「復興支援のためのアートの企画提案・ブレインストーミング」

11月10日(土)

共星の里での講演会・ワークショップの約2週間後に開催しました。最初に当プロジェクトの担当教員である知足美加子准教授による「アートプロジェクトに先立つ関係づくりとカウンターパートの重要性」について講義があり、続いて共星の里の柳和暢さんと尾藤悦子さん、杉岡製材所の杉岡世邦さんから「自分にとっての復興と未来のビジョン」を話していただきました。その後、4グループに分かれて、庭園の利用法を考える企画提案・ブレインストーミングを実施。10月26日のワークショップからの継続受講生に、この日からの新しい顔ぶれの受講者も加わり、「作った庭園へ、どのような人に来てもらいたいのか？庭園をどのように使いたいのか？」のアイデアを出し合いました。

参加者：12名 場所：九州大学大橋キャンパス デザインコモン2F
時間：13:30～16:30 参加費：無料
講師：柳 和暢（共星の里アートディレクター）、尾藤 悦子（共星の里ゼネラルマネージャー）、杉岡 世邦（㈲杉岡製材所代表取締役社長）、知足 美加子（SAL教員）
スタッフ：中村 美亜（SAL教員）、村谷 つかさ・白水 祐樹（SALスタッフ）
映像記録：園田 裕美
後援：福岡市、九州大学災害復興支援団

受講生's ideas

水を引いてホテルが飛ぶ環境を作り、夜も訪れることが可能な場にする。

岩の配置を固定せず動かせるようにしておき、来るたびに景色の違う庭園にして、スペインのサグラダファミリアのように「未完」の魅力を楽しんでもらう。

桃の樹を植えて、樹木の成長も楽しめるようにする。

災害で黒川地区に住めなくなった人が時々戻って来て、懐かしさに触れられるような庭園にする。



講師プロフィール

柳 和暢(やなぎ かずのぶ)
共星の里アートディレクター
現代美術作家。1947年福岡県朝倉市生まれ。1971年に渡米し、30年をサンフランシスコで過ごす。日本、アメリカ、ヨーロッパなどを舞台に個展やライブペインティングを行うほか、喜多郎のライブツアーやアルバムジャケットのアートワークを手掛けるなど、幅広い活動を行っている。2000年から「共星の里」のアートディレクターとして企画・運営に携わる。

尾藤 悦子(おとう えつこ)
共星の里ゼネラルマネージャー
ファッションデザイナー。福岡県朝倉市生まれ。オートクチュールファッションデザイナー、テルコ・オトに師事し、パターン・デザインと和服を学ぶ。2000年に「共星の里」を立ち上げ、以後、企画・運営に携わる。そのかわら、2011年に「アート感のある現代のジャポニズム」をコンセプトにした創作服「Kien」を発足し、「共星の里」を拠点に衣食住を通し、真の豊かさの追求を続けている。

杉岡 世邦(すぎおか としくに)
(有)杉岡製材所代表取締役社長
杉岡製材所三代目。1969年福岡県朝倉市生まれ。長崎大学経済学部卒業。凸版印刷(株)に5年勤務後、家業を継ぐ。住宅、社寺、文化財等の木材を請け負う。西日本新聞にて『木挽棟梁のモノサシ』(15回)、『住まいのモノサシ』(42回)を連載し、木の魅力を発信した。2016年より九州大学大学院芸術工学府博士後期課程在籍。(一社)日本茅葺き文化協会理事、(一社)日本板倉建築協会理事。

知足 美加子(ともたり みかこ)
SAL教員
博士(芸術学)、彫刻家(国画家会員)。山岳修験道学会評議員(英彦山山伏「知足院」の子孫)。新潟県中越地震、東日本大震災、熊本地震、平成29年7月九州北部豪雨において、アートを通じた復興支援活動を行う。平成29年7月九州北部豪雨では災害流木のしおりを制作して義援金とする活動、旧朝倉市立松末小学校にて時計づくりワークショップ等を行い、樹齢132年の災害流木で制作した彫刻「朝倉龍」を朝倉市立杷木小学校に寄贈した。

災害復興×アート、美しい庭としての再生 知足 美加子 (SAL教員)

大規模な山林崩壊(約1065万立方メートルの土砂流出)を引き起こした平成29年7月九州北部豪雨。災害直後、私はおびただしい量の流木や巨石が流れついた「共星の里(朝倉市黒川の廃校利用の美術館)」の被災現場に圧倒されながらも、「ここがいつか美しい庭として再生している」というイメージが心に浮かびました。「人間が心の力を出し合い共同で何かを創造することは、尊厳を回復し前を向く契機となる」。そう信じて復興ガーデン制作を企画しました。本プロジェクトは「命」を潜(ひそ)し、心安らぐ空間(庭)を、愛をもって創造するものです。

黒川は英彦山修験道文化圏に属し、室町時代より英彦山座主院を大切に守ってきた地域です。英彦山には、自然を凝縮し慈しむ石庭が複数存在します(知足は英彦山山伏の子孫)。修験道は自然を信仰の核におき(山川草木悉皆成仏)、水、植物、石、土(微生物)、気配にも神仏を見出しました。英彦山修験道および禅の庭に習い、植物や粘菌なども取り入れ企画・提案を行います。

庭は3年の時間をかけ、一般市民とともに企画・制作します。地域内外の方々と深く感じ、考えあわせることで、人々の意識が「場」に永続的につながることを目指します。最終年度には、庭を静かにみつめ感得したものを、互いに自由に表現し交流する「美的コミュニケーションの場」を設けたいと考

「庭」そして「バイオアート」が持つ力

白水 祐樹 (SALスタッフ)

2017年7月の豪雨は、朝倉市出身の私にとって強烈な衝撃でした。子どもの頃からの馴染みのお菓子屋さんが濁流に浸かっているニュース画像に、ただ愕然としました。

「黒川復興ガーデンとバイオアート」プロジェクトに携わることになり、その舞台である共星の里へと、私は何度も訪れるようになりました。共星の里のある黒川地区へ向かう途中には、子どもの時よくホテルを見に立ち寄った三奈木の水辺や、小学生時代の毎年の遠足コースだった寺内ダムがあります。それらの風景を見る度に、私は心の中に温かいものを感じました。

「自分を育ててくれた場所」に帰って来た時の、懐かしさや安堵感。それは、人が生きる上で大きな意味を持つと思います。平成30年度の当実践講座の受講者の中には、平成29年7月九州北部豪雨被災地域の出身の方も数名いました。そうした人たちは、「自分の故郷のために、何かできないだろうか」という動機だったでしょう。一方、大半の受講者は、被災地が「故郷」ではない人たちです。が、出身地など関係なく、受講者

えています。

そのためにまず本年度は「感じることから始める」をコンセプトに被災地を巡る現地研修(7月)を実施しました。10月に共星の里において、杵野俊明講演会(禅僧、作家)を開き、禅の庭の根本概念について学びました。その後参加者はグループに分かれ、造園にむけてのアイデアを創出しました。11月には、本学に柳和暢、尾藤悦子(共星の里)、杉岡世邦(杉岡製材所)を招き、前回のアイデアをブラッシュアップするブレインストーミングを行いました。

来年度は黒川地区を中心とした被災地の方々に、できるだけ個別に聞き取りを行えたらと考えています。仮設住宅とみなし仮設は、2019年の夏を目処に入居の期限が終了してしまいます。これからの住居や仕事をどうするのか、入居者は決断を迫られているのです。周囲を気遣い、その心労を公に声にしない方々も多いでしょう。聞き取りの際は上記の庭の企画案についても意見をうかがい、「造園後には立ち寄って、近況を語りあう場にしてほしい」と伝えるつもりです。大規模災害が複数発生している昨今、九州北部豪雨災害被災地への関心が薄れたように感じる方や、「我慢しなくては」と苦しさを抱え込む被災者もいるかもしれません。しかしここが幸せな復興をとげる姿は、今災害に直面する人々にとっての救いや希望になることを忘れてはなりません。

私たちは真剣に「どんな庭を作れば、被災地の方々に喜んでいただけるか」を話し合っていました。

この、「被災地域出身者とビジター(外部からやって来た人)と一緒に作り上げていく」というプロセスこそが、当プロジェクトの特長だと感じます。庭作りに関わった人たちは、きっと今後も黒川に愛着を持ち、完成した庭園にも足を運びたくなるでしょう。

最後に、心に残った一コマを紹介します。私が共星の里を訪れた際、その周辺で作業をしていたボランティアの人が、何気なく、こう言いました。

「ほら、その小川に魚が戻って来てるよ」。

その嬉しそうな表情を見た時、私は「バイオアート」という言葉の意味が少し分かった気がしました。

小さな魚が、川で泳いでいる。そのことが、私たち人間の心をどれだけ明るくしてくれるか計り知れません。造園が進み、花が咲き、ミツバチやチョウがたくさん飛ぶようになれば、その姿もまた私たちを励ましてくれることでしょう。

「演劇と社会包摂」 制作実践講座

共催：認定NPO法人ニコちゃんの会
後援：福岡県、福岡市



第1回講座 7月14日(土) オリエンテーション「表現と出会う」

↓
フォーラム「わたしたちの舞台はどこにある？
—劇場と社会包摂を考える実験—」

第2回講座 7月15日(日)・16日(月・祝) ワークショップ「身体で知りあう表現とケアの2日間」

舞台制作実習 現場でのインターンシップ

7月21日(土)～12月23日(日・祝)

第1回 7月21日(土)・22日(日)

↓
第2回以降 11月15日(木)～12月20日(木)

↓
公演 12月21日(金)～23日(日・祝)

第3回講座 2月17日(日) ディスカッション「共に振り返る」



撮影(2点とも)：富永 亜紀子

九州大学ソーシャルアートラボでは、今年度「演劇と社会包摂」をテーマに制作実践講座を開催しました。多様な身体を持つ人々が参加する演劇作品の制作プロセスを体験することを通して、障害のある人とのコミュニケーションのあり方や、舞台制作の現場におけるケアのあり方など、多様な表現を支えるために必要なコト・モノを実践的に学んでいくことを目的としました。

受講生はオリエンテーション、公開フォーラム、ワークショップを経て、演劇制作の現場にインターンとして稽古から公演までの作品制作に関わり、ディスカッションで今回の体験を振り返るという一連のプロセスを通して、これからの活動に活かせる形で「学び」を展開することを目指しました。

【第1回講座】 オリエンテーション「表現と出会う」 7月14日(土)

講座の概要・流れとともに、共催団体である認定NPO法人ニコちゃんの会の代表・森山淳子さんから、なぜ演劇を行うようになったのかをうかがいました。また、これから半年間ともに関わることになる受講生一人ひとりの自己紹介も行われ、それぞれ年齢や社会的な立場も異なるなかで、受講の動機と抱負を述べていただきました。その後、移動してフォーラム「わたしたちの舞台はどこにある？」(右ページ参照)に観客として参加しました。

参加者：13名 時間：15:00～16:30
会場：九州大学大橋サテライト「ルネット」 参加費：無料
講師：森山 淳子(認定NPO法人ニコちゃんの会代表理事)、
長津 結一郎(SAL教員)、宮本 聡(SALスタッフ)
スタッフ：認定NPO法人ニコちゃんの会

第1回講座

フォーラム

「わたしたちの舞台はどこにある？ —劇場と社会包摂を考える実験—」

7月14日(土)

フォーラムの前半は、異ジャンルコラボバンド「門限ズ」の野村誠さん、吉野さつきさん、倉品淳子さんによる先進的な取り組みについての映像を交えてのプレゼンテーションが行われました。

俳優であり、演出家でもある倉品さんからは、「障害」や「老い」といった身体的にバラエティのある人たちとの演劇制作に演出として関わってきた中での発見や気づきを、ワークショップコーディネーターの吉野さんからは、これまでの「門限ズ」の取り組みや、障害のある人の舞台芸術の取り組みをご紹介いただきました。また作曲家である野村さんからは、3カ月間レジデンスをされた香港の障害福祉施設「賽馬會復健中心(ジョッキー・クラブ・リハビリテーション・コンプレックス)」での取り組みをご紹介いただきました。

後半は、野村さんによるピアノを用いた演奏パフォーマンスに加え、会場の参加者を巻き込んだ身体パフォーマンス、そして観客から登壇者への身体を用いた「質疑応答」が即興的に行われました。そこには、従来の登壇者／観客という形ではなく、身体を用いた一体的な空間が現れていました。

2時間半という長丁場のフォーラムでしたが、80名の定員を越える参加者にご来場いただき、盛況となりました。

講師プロフィール

野村 誠(のむら まこと)

作曲家・ピアニスト

インドネシアと日本で何度も上映される度に変化する作品「踊れ！ベートーベン」、日英共同の「ホエール・トーンオペラ」など、20カ国以上、40都道府県以上で、分野を横断し人と環境と出会いながら、作曲プロジェクトを展開している。異ジャンルコラボバンド「門限ズ」では、「ノム」として活躍中。



吉野 さつき(よしの さつき)

ワークショップコーディネーター・愛知大学文学部教授

教育、福祉などの現場でアーティストによるワークショップを数多く企画。アウトリーチ事業やコミュニティアーツプログラム、ワークショップ等の企画運営を担う人材育成にも各地で携わる。異ジャンルコラボバンド「門限ズ」では、「めい」として活躍中。



倉品 淳子(くらしな じゅんこ)

俳優・演出家

1990年より俳優として劇団山の手事情社にて舞台表現を追求する傍ら、インプロや大道芸、「あなご事情団」「門限ズ」などのユニットに参加し、演劇の可能性を広げる活動も同時に行ってきた。異ジャンルコラボバンド「門限ズ」では、「じよほんこ」として活躍中。



長津 結一郎(ながつ ゆういちろう)

SAL教員

専門はアートマネジメント、社会包摂。博士(学術・東京芸術大学)。異なる立場や背景をもつ人々がどのように協働することができるのか、ワークショップの開発や協働の場づくりを題材として研究／実践の双方からアプローチを試みている。



撮影(3点とも)：富永 亜紀子

参加者：83名 時間：18:00～20:30(17:30開場) 会場：九州大学大橋キャンパス 多次元デザイン実験棟ホール 参加費：無料
スタッフ：村谷 つかさ・宮本 聡・有馬 恵子(SALスタッフ)、富樫 悠紀子(九州大学大学院芸術工学部)、認定NPO法人ニコちゃんの会
舞台監督：横山 剛志 UDトーク：後藤 渚(九州大学大学院芸術工学部)、下田 成大(九州大学工学部)、川上 里以菜(九州大学芸術工学部)
映像記録：園田 裕美 協力：九州大学キャンパスライフ・健康支援センター インクルージョン支援推進室
音響：九州大学芸術工学部TRP(テープ・レコード・プレイ) 照明：九州大学芸術工学部照明屋
映像投影：九州大学芸術工学部Rec-lab 後援：福岡県、福岡市

第2回講座

ワークショップ 「身体で知りあう表現とケアの2日間」

7月15日(日)・16日(月・祝)

多様な身体をもつ俳優たちによる演劇制作の現場に入る前に、俳優たちを交えた身体ワークショップを実施しました。

1日目は、異ジャンルコラボバンド「門限ズ」の4人(野村誠さん、遠田誠さん、吉野さつきさん、倉品淳子さん)のほか、公演「走れ!メロス。」に出演する俳優・森裕生さん、里村歩さんを講師としたワークショップを行いました。「身体で知り合う」というテーマで、障害のある俳優たちやインターン生、門限ズのメンバーといった人々によって、さまざまなコミュニケーション手法を用いながら関わり合うことが試みられました。

2日目は、「門限ズ」の遠田さんと倉品さんによる、ダンスと演劇の手法を用いたワークが行われました。日常のふとした仕草から、その意味を引き剥がして、動作(振り)にしていくダンスの手法や、日常のコミュニケーションを切り取り構成していく演劇の手法について体験する機会を得ました。また、ニコちゃんの会が制作した前作の演劇「BUNNA」に出演した俳優の鈴木玲雄さんからは手話での表現について学びました。

参加者: 19名 時間: 7月15日13:00~18:00、16日10:00~16:00
会場: 九州大学大橋キャンパス3号館322教室ほか 参加費: 無料
スタッフ: 宮本 聡(SALスタッフ)、藤原 健司(九州大学大学院芸術工学府)、認定NPO法人ニコちゃんの会



講師プロフィール

野村 誠(のむら まこと)→前ページ参照
吉野 さつき(よしの さつき)→前ページ参照
倉品 淳子(くらしな じゅんこ)→前ページ参照

遠田 誠(えんだ まこと)
ダンサー・振付家
日常のはざ間にダンスその他諸々を割り込ませた「まことクラブ」を主宰し、劇場はもとよりアートスペースや商店街など、サイトスペシフィックな活動を展開する。異ジャンルコラボバンド「門限ズ」では、「エンちゃん」として活躍中。

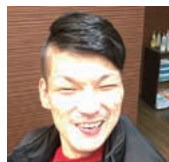


撮影: 427FOTO

森山 淳子(もりやま じゅんこ)
認定NPO法人ニコちゃんの会代表理事
認定NPO法人ニコちゃんの会を設立し、非日常的な時間や場づくりを積極的に取り入れ、演劇・身体ワークショップなど、福岡市内を中心に企画・実施する。



森 裕生(もり ゆうき)
舞台パフォーマー
講演家・プロマジシャン・役者・モデル・ボカリストといった顔をもつ。先天性脳性麻痺による四肢体幹障害という才能がある。ステージネームは「Mr. Handy」。



里村 歩(さとむら あゆむ)
俳優
生まれつきの障害ではなく、原因不明で突然発症する。2014年より俳優としての活動を開始。認定NPO法人ニコちゃんの会の俳優として継続的に活動している。



鈴木 玲雄(すずき れお)
俳優
福岡ろう劇団博多において、代表・俳優として公演を企画、出演している。九州聴覚障害者団体連合会青年部長を務め、聴覚障害者支援の活動にも携わっている。



長津 結一郎(ながつ ゆういちろう)→前ページ参照



撮影(このブロックすべて、★): 富永 亜紀子

舞台制作実習

演劇「走れ!メロス。」 現場でのインターンシップ

第1回: 7月21日(土)、22日(日)

第2回以降: 11月15日(木)~12月20日(木)

第1回講座、第2回講座で学んだことをもとに、舞台公演に向けての作品制作の現場へインターン生として参加しました。対象となる舞台は、認定NPO法人ニコちゃんの会と、(公財)福岡市文化芸術振興財団が主催した演劇「走れ!メロス。」です。個別面談を経た後、実際の作品制作のプロセスに触れ、生み出される作品に関わる体験を通じて、障害のある人との制作手法やケアの在り方、舞台の工夫などを実践的に学びました。第2回以降は、期間中公演に向けた稽古が毎日夕方から行われ、実習としての参加時間は各自相談に応じて進められました。

インターン生: 12名
会場: ゆめアール大橋 大練習室ほか
参加費: 無料(交通費などの実費負担)

メンタープロフィール

宮本 聡(みやもと さとし)
SALスタッフ
障害のある人々の創作表現活動を通じて「生」の接続を研究主題に、アートと日常的なケアの現場に参加を行っている。2017年、九州大学大学院人間環境学府単位取得退学。修士(感性学)。専門は教育人類学。



稽古の現場でのケアとそのおもしろさ

稽古の現場では、俳優さんたちと食事、着替え、トイレ、移動などの介助/ケアを通して積極的に関わりを持ちます。稽古後の汗びっしょりのTシャツや疲れて緊張が高まっている身体、着替えながらも自分の演技を振り返る姿などをそばで感じていると、あらゆる角度からその人の真剣さや熱い想いがひしひしと伝わってきます。また、身体を思うように動かせない俳優さんたちにとって、衣装のよれや靴やサポーターの締め付け具合などによる違和感を自分で治すことができません。それらは、集中力の維持や身体や疲れのコントロールにつながることも多く、ケアすることは作品の「仕上がり」にとっても大事な役割を担っているのです。

「このくらいのキツさで大丈夫?」と一つひとつ確認しながら留めていくなど、丁寧な関わりが求められます。介護の世界では、人の心に寄り添うことの重要性がよく語られますが、この現場では、「この人がベストな形で舞台に立てるように」と自然に考え、そのためのケアの在り方を模索したくなります。ケアをする側もされる側も自然と歩み寄りたくなる、きさくで温かみのある関係性が生まれているのです。そのような空気感を体験できたことも今回の講座の醍醐味だったのではないかと思います。

漆山 阿弥(うるしやま あみ)
認定NPO法人ニコちゃんの会
スタッフ



公演当日 演劇「走れ!メロス。」現場レポート

12月21日(金)~23日(日・祝)

認定NPO法人ニコちゃんの会は、多岐に渡る活動の中で、2007年より俳優・演出家の倉品淳子さんとともに身体に障害がある人たちの演劇活動に取り組んでいます。福岡市文化芸術振興財団はこの取り組みに賛同し、2017年よりニコちゃんの会と連携して「身体に障がいのある人のための俳優講座」を開催。続く2018年の演劇「走れ!メロス。」が、今回の舞台制作実習の現場となりました。

「走れ!メロス。」の3日間の公演では、インターン生たちは稽古期間中に学んだこと、身に付けたことを実践しました。

インターン生：12名 会場：ゆめアール大橋 大練習室
参加費：無料(交通費などの実費負担)



★

【舞台公演でのインターンの役割】

- ◎字幕投影
- ◎衣装補助
- ◎舞台美術制作補助
- ◎受付
- ◎場内誘導
- ◎クローク
- ◎搬入・搬出
- ◎ほか



★



★

公演情報

身体的にバラエティあふれるひとたちの演劇公演「走れ!メロス。」

12月21日(金) 19:00~、22日(土)・23日(日・祝) 15:00~

構成・演出：倉品 淳子

出演メンバー：北島 美由紀、小出 直子、小寺 美咲、里村 歩、佐野 優馬、瀬川 サチカ、堤 泰子、中江 育子、中村 とし子、中村 ひとみ、二ノ宮 直子、平畑 貴志、廣田 湊、森 裕生、山口 恭子、尾崎 礼、井上 直己

主催：認定NPO法人ニコちゃんの会、公益財団法人福岡市文化芸術振興財団、福岡市

未知と出合って、経験を放ってみる

私は「走れ!メロス。」ではニコちゃんの会と協働する財団制作スタッフとして関わりました。障がい者とうどう接していいのかわからないことから始まり、これまでの経験は通用しない現場に放り込まれた不安と未知なる創作に興奮する日々でした。しかし終わると同時に、もやもやが生まれました。

何が成功で、何を生みだし、何を育てて、何が解決したのだろう。障がい者や介護する方々の日々から遠のいて、障がい者と演劇を創ったことが「経験」となり、財団として「実績」となって固まってしまうかもしれないし、そもそも自分が関わった日数だけで障がいのことを理解できたのか……多くの問いが心の中で渦巻いていました。



つい先日、介護施設でのワークショップに同行しました。自分では動けない要介護者を、ダンサーが寝転がって自分のお腹にのせ、お互いが位置や重みをいたわるようにゆったりと動き始めました。施設職員が驚いて、ダンサーと同じ動きをほかの介護者としてはじめ、「自分たちは急ぎ過ぎていたのかもしれないね」と口にされていました。もやもやしてなければこの言葉に反応することはなかっただろうと思います。

自身を疑い直すきっかけを「走れ!メロス。」が与えてくれました。現場に長時間いる優越感に溺れさせない観客の存在や演劇という懐の広さと厳しさにもあらためて気づかされました。多くのひととの関わりで生まれる距離感の伸び縮みや情熱の濃淡にも敏感になったように今は思います。受講生の皆さんはどうだったのでしょうか。聞いてみたいです。もやもや。

菅原 力(すがわら ちから)
(公財)福岡市文化芸術振興財団 事業課
シニア事業コーディネーター

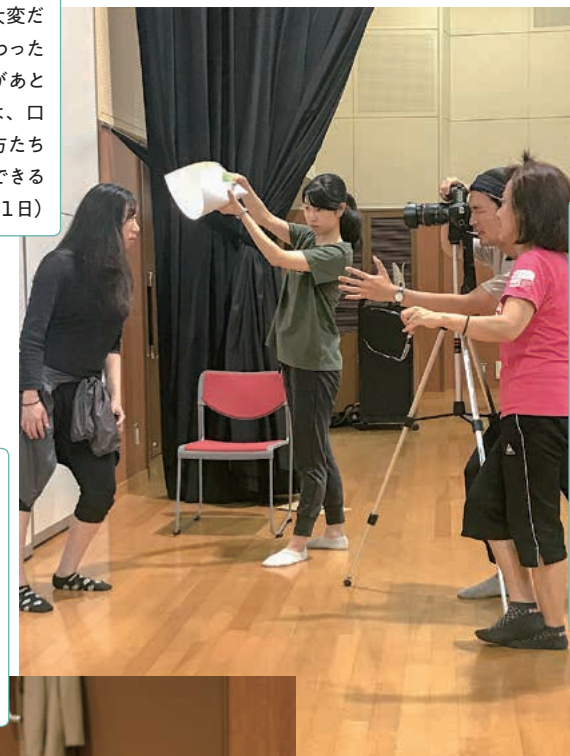


撮影：★=認定NPO法人ニコちゃんの会

インターン生's voice

インターン生から出た意見や感想をインターン日誌からダイジェストにてお伝えします。

演劇をした後の感情の切り替えが大変だった。たとえば、怒りを表現し終わった後は、なんだかムカムカした感じがあとを引いていたし、楽しく歌った後は、口角がずっと上がっていた。役者の方たちは、こんな感情のコントロールができると思うと、すごいと感じた。(7月21日)



話すことをあきらめない／伝えるのは話だけじゃない／サポーターをつける／お手洗い介助／話し合い／記録／室内温度調整(環境)／カメラ／髪セット／水分補給補助。
互いをよく知らない中で、演劇をするにはむずかしい。だからこそ、互いを知り合うワークショップはとても大事だと感じた。その中で、「話をすることをあきらめないこと」「伝えるのは話だけじゃない」という、じょんこさん[※]の言葉が、印象的だった。(7月22日)
※=倉品さん

車いすダンスをするうえで、お互い安心して任せられるにはアイコンタクトが大切だとわかった。それは車いすダンスに限らず、目を見て動いたり話したりする方が伝わりやすいし、安心、信頼がある。視線を合わせて話すよりよい。話す、相談することをあきらめないで、という倉品さんの言葉が印象的でした。(7月22日)



最後の方でわかったが、ひとみさん[※]はうなずいて聞いていてもよくわかっていないときもあるようだった。しかし倉品さんが言っている意味を私がわからないことも多く、手話通訳もなかなかむずかしかった。(11月23日)
※=出演者の1人



2週間来られないうちに形になっていておどろいた。夏のワークショップや、前回来た時に30分で考えていたダンスも形を変えて取り入れられており、その使い方や演出に感心しきりだった。トップダウンの稽古風景しか見たことがなかったので、出演者全員でコミュニケーションを取りながら作り上げていることに、その創造性に面白さを感じた。(12月5日)



わかったつもりはコミュニケーションではない／手話を聞かず、ということ／演劇は感情が大事／自分の感覚だけではなく、周りの位置関係。
曲入り部分で車いすと体がひとつになって、人間が人形的(機械的)になる。固定された不自然な身体が、車いすから離れてまた息が吹き替えられるような演出がとても演劇的だと思った。音出しの瞬間が、自分の声出しのように緊張した。(11月24日)



最初の場面から、「走れ!メロス。」の稽古をしている際に、倉品さんが台詞の一つひとつの言い方や間、声の大きさから見える感情について、細かく演出されており、皆さんの台詞に魂が入っている様子がとても印象に残りました。台詞に込められた感情は、言い方が少し変わるだけでこんなにも変わるのだと思いました。また、ダンスの場面で、表情や一つひとつの仕草が少し違うだけで、印象が伝わる想いというものが(観客に対して)変わるのだと思いました。演者の皆さんの熱い演技では、「走れ!メロス。」の世界観に引きつけられました。また、内容の流れ、演出の仕方が変わっており、その独特で不思議な最後の場面に(原作の)『走れメロス』の見方が変わりました。話し合いの中でも考えましたが、少数派と多数派の世界というように日本の問題も取りこまれていて、「走れ!メロス。」が伝えるテーマについて考えさせられました。(12月7日)

今まで稽古には何回も来ているけど、初めて見るシーンが多かった。服を着せるシーンでは、そのシーンに至るまでよい感じで流れていたのに、1つの事ですべてが台無しになるということが感じられた。たかが服を着せるだけだけど、舞台では一つひとつのシーン、動作が大事であり、意味をもっていることを実感した。その事は、その後の稽古をみているとすごく納得。倉品さんが出演者一人ひとりの動きをよく見ているなどと思った。(12月9日)



字幕は1つのスライドにたくさんの情報があって、ネタバレになってしまうなど感じた。UDトーク*など音声認識機能が使えればいいが、むずかしそうだ。(マイクなど)とりあえず明日の通し稽古で感触をみてみようと思った。演者さんたちはみな滑舌がよく、UDトークでも認識しやすいだろうなとは思った。(12月10日)

※=音声認識、音声合成機能を使ってコミュニケーションの「UD=ユニバーサルデザイン」を支援するためのアプリ



【第3回講座】ディスカッション「共に振り返る」 2月17日(日)

自分とほかの参加者たちの体験を言語化することを目指し、参加者や認定NPO法人ニコちゃんの会のメンバーらと振り返りを行いました。作品や稽古期間についての振り返りを行ったあと、「演劇やその現場で多様性を大切にすることはどういうことか」をテーマに全体で対話をしました。



インターン生の声

◆個々の身体で表された表象性を大切に。感情と動きはつながっていると思うので、思い方だったり、動かし方だったり。多様性を大事にするってことは、オリジナリティを楽しむということ。演劇として。

◆見る側も演じる側も、すべてのスタートラインが、演じる側も身体に障害があったりとか、健常者よりも何か劣っているという訳ではなく、スタートラインがみんな一緒でそこから始めることができるもの。同じスタートに立って、一緒に見ることができるもの、一緒に演じることができるものなんじゃないかなって思います。

参加者：5名 時間：13:00～17:00 会場：九州大学大橋キャンパス7号館1階シアタールーム 参加費：無料
講師：森山 淳子(認定NPO法人ニコちゃんの会代表理事)、長津 結一郎(SAL教員)、宮本 聡(SALスタッフ)

現場の中で「モヤモヤ」し続けること

宮本 聡 (SALスタッフ)

今回「演劇と社会包摂」制作実践講座では、認定NPO法人ニコちゃんの会の主催する多様な身体のある人々の演劇の現場(「走れ!メロス。」)でのインターンシップを行いました。

ニコちゃんの会の制作現場では、従来の劇場での裏方の役割だけではなく、多様な身体のある俳優たちの表現を支えるうえでのコミュニケーションの工夫や、身体へのケアに関わることも外せないものとなっています。そういった意味で、現場での学びは、芸術や福祉といった領域を横断する形で展開していききました。

現場での学びを振り返ると、大きく3つのフェーズがありました。まず「知り合う」というフェーズ。私たちは、ふだん、ファーストコンタクトの段階において、非言語的な側面が大きな役割を果たしていることを忘れてしまいがちです。講座では、社会的な属性や立場といったもの以前にそれぞれの身体が異なっていることを基盤にした「知り合い」からスタートしました。門限ズのワークショップを通して、受講生は、自らの身体を持って、異なる身体と戸惑いを含みながら共に表現することで知り合っていました。同時にそれらを「鏡」にして自分自身を知ることでもあったと考えています。

稽古へのインターンでは、ある作品が生まれていく過程に「寄り添う」という時間でした。「走れ!メロス。」は、稽古の中で出てきた表現を集めることによって作品自体が構成され

ていきました。始めから決まった形が見えている訳ではなく、未知なるものを試行錯誤しながら目指すものであり、そこでは臨機応変な動きが求められていきます。一見「待ち」と感じられる時間も、現場の雰囲気や流れをつかむうえで重要であり、そのことを通じて、お客さんの立場から作品を構成するピースへと変容していくと感じられました。

最後に、体験を言葉にしていくフェーズ。講座では、日誌や報告を稽古へ参加する毎に設定していました。これは記録としてだけではなく、体験を言葉にすることで個別に意味づけることにつながります。もちろん五感で得た体験を言葉にしていくことは難しさがあります。足繁く参加していた受講生の一人は、参加すればするほど、明確な文章の形で表現することが難しくなっていました。このことは、現場での学びの難しさだけではなく、現場で学ぶことの豊かさ、新たな学びへの可能性が現れているとも感じています。

受講生は、今後それぞれの立ち位置から、各々の活動を行っていきます。これから、言葉にできなかったものが、ある種宿題のように、ふっと現れ、改めて意味が見出され、次の活動のきっかけとなることがあるのではないかと思います。そのように、半年間に渡る学びの体験が、それぞれの活動や次なる学びへとつながっていくことを期待しています。

境界線にアプローチする機会として

長津 結一郎 (SAL教員)

いま、障害のある人の表現活動に対する制度化が急速に進んでいます。ですが、障害のある人の表現活動というものを、いったいどのように捉えたらいいかわからない、という声も多く聞かれるように思います。

もちろん、表現の場をひらくことが、障害のある人自身にとってのエンパワメントや、芸術表現を高めていく機会づくりにつながっていくことは疑いようありません。ただし、このことを福祉政策としてのみならず文化政策として振興していくからには、障害のある人の表現活動を通じて、新たな芸術文化の萌芽が開かれることを、つい期待してしまいます。公演「走れ!メロス。」は、さまざまな「境界線」について扱った演劇だったように思います。障害と健常、老いと若さ、ケアする人とケアされる人、役柄としての王と民衆。そしてラストシーンではステージと観客席の境界に果敢にアプローチする演出が試みられました。境界に出会い、そこに向き合うこと。境界の向こう側とこちら側の“ちがひ”を知ること。そのエネルギーが、新たな表現を生み出すひとつの契機とな

っているように感じられます。

今回インターンシップで関わらせてもらったのも、いわばその「境界線」へのアプローチの一つだったかもしれません。スタッフとして演劇に関わることは、単なる裏方であるだけでなく、その動きによって演劇作品の見え方や、演劇が行われる時間の過ごし方が左右される、重要な役回りです。なかでも、舞台上での日本語字幕投影や、稽古中の手話通訳の補助などは、出演者にも観客にも多様な人が参加できるための工夫が必要とされます。

表現活動だけではなく、それを享受する環境や、それを取り巻く生活の豊かさを創造するきっかけをいかに作ることができるか。障害と健常の「境界線」に、いかに多様にアプローチできるか。今後もこのような問いを持ちながら、事業に取り組んでいきたいと考えています。

奥八女芸農プロジェクト

共催：特例認定NPO法人山村塾 後援：福岡県、八女市

「奥八女芸農ワークキャンプ」 スタート

8月24日（金）



「奥八女芸農学校」

8月29日（水）～31日（金）



「奥八女芸農ワークキャンプ」 成果発表

9月16日（日）



終了

9月20日（木）



地域とアートが関わる取り組みが、日本全国で行われるようになって久しくなりました。ですが、アートを通じて地域に実際にどのようなことがおこり、それにはどのような意味があるのか、と考える機会は、まだまだ不足しています。

九州大学ソーシャルアートラボではこのような地域とアートの問題について考えていくため、福岡県八女市黒木町笠原地区において、さまざまな試みを平成27年度から実施してきました。平成27年度のリサーチを経て、平成28年度には福岡市内から大型バスで笠原地区に訪れる「アートバスツアー」を企画、平成29年度には公募で集まった参加者の方たちがアート・ワークショップを体験したりアートプロジェクトを

構想したりする講座などを行いました。

平成30年度はこれらのプロジェクトを発展させ、「奥八女芸農プロジェクト」を立ち上げ、2つの取り組みを並行して実施しました。1つは2泊3日の合宿型講座プログラムを行う「奥八女芸農学校」です。もう1つは、特例認定NPO法人山村塾で長年実施している国際ワークキャンププログラムと協働した「奥八女芸農ワークキャンプ」で、28日間のプログラムを実施しました。この2つのプログラムはリンクし、「奥八女芸農ワークキャンプ」で制作された作品を、「奥八女芸農学校」の参加者が体験する講座も持ちました。

平成28年度

アートバスツアー

里山を編む～天神・奥八女バスの旅～

参加者に自分自身の物語を編んで欲しいという思いを込めて制作されたバスツアー。バスは福岡市中央区天神を出発。奥八女では、棚田や茶畑が広がる里山の風景を目にしながら、地域で継承されている人形芝居を体験したり、水害で流されたキャンプ場や、廃校となった小学校の体育館を舞台にしたインスタレーション作品を巡ったりしました。里山に生きる人々の暮らしや思いを、アーティストとともに体験する7時間の小旅行でした。



平成29年度

奥八女芸農学校



アーティストによるワークショップを体験し、それをもとに企画を立案するプログラム。3日間の合宿形式で3人のアーティストによるワークショップを開催し、その体験をふまえて受講生たちがさまざまな企画を考案しました。合宿から約3カ月後に行った公開シンポジウムでは、受講生が考えた企画をポスター形式で発表しました。プログラム中や終了後には、受講生が考案した複数の企画が、奥八女を舞台に実施されました。



「奥八女芸農学校」

8月29日(水)～31日(金) [3日間]



8月29日(水)

13:15 開会式、自己紹介
14:00 ワークショップ「渡りゆく物語」
17:00 オリエンテーション、夕食準備
19:30 修了生の活動紹介
21:00 1日の振り返り
21:30 懇親会

8月30日(木)

9:00 農業体験(田んぼの草取り)
13:30 ワークショップ
「現代に民俗芸能をつくる」
17:30 地域の方々との交流会

8月31日(金)

9:00 全体振り返り
11:30 終了、解散

2泊3日の合宿型講座プログラムと、奥八女芸農ワークキャンプで制作された作品を体験する講座(P28参照)を持ちました。

合宿型の講座プログラムではワークショップ、レクチャー、農業体験を実施。ジェームズ・ジャックさんによるワークショップ「渡りゆく物語」では、笠原地区に移住する外国人に向けた移住ガイドブックを想定し、創造的に制作する共同作業を試みました。また、特例認定NPO法人山村塾が整備する棚田に行き、山村塾の皆さんから被災時の状況についてのレクチャーを受け、全員で畑に入り雑草取りなど棚田整備を行いました。その後、旭座人形芝居会館に移動。演出家の武田力さんによるワークショップ「現代に民俗芸能をつくる」ではグループに分かれて、滞在期間中に印象的だった出来事をもとにした即興的な身体表現に挑みました。



参加者：11名(奥八女芸農ワークキャンプ参加者3名、日本人4名、外国人留学生4名)
開催地：福岡県八女市黒木町笠原地区 参加費：無料(要実費)
対象：文化事業に携わっている方、将来携わりたいと考えている方
ファシリテーター：小森 耕太(特例認定NPO法人山村塾事務局長)、朝廣 和夫(SAL教員)、中村 美亜(SAL教員)、長津 結一郎(SAL教員)、村谷 つかさ(SALスタッフ)
コーディネーター：有馬 恵子(SALスタッフ)
スタッフ：石田 絵理香、大浦 彩音、特例認定NPO法人山村塾 映像記録：仁田原 力
協力：手塚 太加丸、森 庄、松尾 高生、Gina Santiyana、旭座人形芝居保存会

講師プロフィール

James Jack(ジェームズ・ジャック)
アーティスト
社会と環境に深く関わる制作を行っている。主なグループ展に、Centre for Contemporary Art シンガポール、福岡県立美術館、アジアアメリカアートセンター、瀬戸内国際芸術祭、Cheryl Pelavin Fine Art、釜山ビエンナーレ、アートフェスティバルなどがある。主な個展はSATOSHI KOYAMA GALLERY、TMT ART PROJECTS、TAMA ギャラリー、Beppu-Wiarda ギャラリー、ポートランドアートセンター、ホノルル美術館など。明仁皇太子奨学金受賞。



武田 力(ただりき)→右ページ参照

撮影(このページすべて):富永 亜紀子

参加者's voices

どんな人でも共感して感じることができるアートを入口に、社会へ関わっていく人々を増やしていくことは素敵だと思います。

最終日。振り返り、ワークショップの意図などを聞き、腑に落ちました。より積極的に自分にもできることをやっていきたいと思うようになりました。

課題を共有、可視化し、体験することで、寄り添えたり、自分のこととして考えるきっかけとなる。自分なら何ができるかを考えることもできていく。そのことで生まれる新しいコミュニティやムーブメントがあると感じられました。

奥八女芸農ワークキャンプ

8月24日(金)～9月20日(木) [28日間]

本企画は、特例認定NPO法人山村塾で長年実施している国際ワークキャンププログラムと協働で実施しました。ゲストアーティストに、演出家・民俗芸能アーカイバーの武田力さんを迎え、地域に暮らす人々の日常や土地の歴史から立ち上がる「民俗芸能」を創作するプログラムを合宿形式で行いました。

香港から2名、ロシアから1名集まった3名の参加者は、作品制作のみならず、武田さんや山村塾とともに、笠原地区の棚田整備、ヤギ牧場の管理等の農作業にも従事することで「半農半アート」の生活を試みました。

こうした体験をふまえて合宿最終日には振り返りセッションを実施し、受講生一人ずつ「アート」「農」というテーマについてプレゼンテーションを行いました。



左からアルバート、ユリア、武田、カシア

参加者：3名(香港から2名、ロシアから1名)
開催地：福岡県八女市黒木町笠原地区
滞在场所：笠原東交流センター「えがおの森」
スタッフ：特例認定NPO法人山村塾
協力：NPO法人NICE(日本国際ワークキャンプセンター)、お茶の里記念館、泰心工房、天空の茶屋敷、靈巖寺

講師プロフィール

武田 力(ただりき)
演出家、民俗芸能アーカイバー
とある幼稚園での勤務を経て、チェルフィッチュや館屋法水氏の演劇に俳優として関わる。近年より自身の制作を開始。「糸電話」「警察署員の対話」「たこ焼き」など、演劇らしからぬ素材を作品に用いるが、それらはアジア各地の民俗芸能の構造に着想を得ている。また、過疎の進む滋賀県内のある集落で継がれてきた六斎念仏踊りの「継承」を担う。こうした相互的な民俗芸能との関わりから、社会課題を軽やかに観客と思考する作品を展開している。



撮影：富永 亜紀子

参加者

Kan Leung Hung Albert [アルバート](香港)
Ku Sin Shan [カシア](香港)
Yulia Yokovleva [ユリア](ロシア)



★



撮影：アルバート



★



★

撮影：★=特例認定NPO法人山村塾

レジデンス・レポート

～笠原地区ですごした28日間～

8月26日(日)

私たちは今日、水田の外にアヒルを放ち、水田の側にネットを張るを手伝いました。晴れた中での作業は暑かったのですが、みんなで一生懸命働き、多くのことを終わらせました。朝6時半に起きた時は、移動中に寝ようかなとも思いましたが、朝の家事で目が覚めて元気になりました。作業中はみんな協力的で、たくさんの方が早くできたように思います。全体的にいい感じ。太陽が燃え盛ってとても暑かったけれど、すべてがとても楽しく、大満足です。[ユリア]



8月28日(火)

今日は午前中に動いたので、天気はそこまで暑くありませんでした。小森耕太さんにどうやってラッキョが育つか、ヤギのコメちゃんをどうやって養っているのかを教えてもらいました。そのあと野菜畑に行き、昼食のための野菜を収穫しました。芸農学校の準備のあと、午後は自由時間で。2日間の活動のあとの、よい気分転換となりました。コメちゃん(ヤギ)は幸せそうで、私たちもいい1日を過ごしました。[ユリア]



8月31日(金)

毎日朝と夕食の前に、コメちゃんにエサをやり、世話をします。彼はかわいくて、人間と対話をするのが好きみたいです。今日は、「奥八女芸農学校」が開催されたあとの、えがおの森の掃除をしました。自分たちの家のように感じるこの場所を、きちんときれいにしておこうと思いました。私は、「伝統文化」の価値とは何か、どのようにそれが将来に向けて「成長」もしくは発達できるだろうか、そのことをどのように持ち帰ることができるか、を考えつづけています。[ユリア]

8月26日(日)～9月1日(土)

このワークキャンプでの経験はとても楽しく贅沢なものです。この一週間のうちに、えがおの森で、収穫のある最初の経験ができました。たとえば、黒木町笠原地区の地元の人や、福岡や大阪から訪れた日本人と深く会話できたことや、雑草を抜いたり植えたりする農作業など。ワークショップを通じて多くの知識を得ることができました。「芸×農」は、私にとっては完全に新しいことです。ですが、芸術というのは私にとってはそれほど新しいものではありません。



「奥八女芸農ワークキャンプ」での滞在中、3人の参加者と武田さんは日記や週報を綴っていました。そこから印象に残るエピソードをダイジェストにて紹介します。

翻訳・編集：長津 結一郎

建築やグラフィックについてはよく知っています。3日間のワークショップと20人での議論は、私が考える芸術に対して、とても大きな影響をおよぼしました。芸術は持続可能性に関わっているということ、芸術はただ実行するだけでなく、地域や、次の世代に対して貢献していくものであると学びました。[アルバート] この地域での「アート」の可能性を探るために、いくつかのワークショップを体験しました。「ボトムアップ」のデザインのアイデアを育てるために、地元の人々とともに滞在したり暮らしたりするという考え方に、そしてもちろん、次の世代に向けた地域の価値を保つということにも感銘を受けました。[カシア]

9月2日(日)

「奥八女芸農学校」の後で人数が大きく減りましたが、みんな、えがおの森での生活に慣れてきて、お互いに楽しく生活ができています。端的に草刈機が使えるようになったのはよかったです。これから回数を重ねることで、より上手になると思います。アートワークについては、当分は笠原のリサーチが必要でしょう。[リキ]

9月4日(火)

今日はさほど暑くもなく、淡々と作業をこなせました。こうして人と日々を暮らすことは久しぶりだったので楽しく思いながら、これをどのように芸能へと結べるか。そのための時間はとても少ないので引き続き、農から色々と考えていきたいと思っています。[リキ]



9月6日(木)

霊巖寺の住職さんへのアボを取ってもらい、お茶の里記念館を見学させてもらう。お話しもする。のち、泰心工房へ。本日は山村塾さんのおかげで3人の方にお話をうかがえましたが、これはまづもって収穫だと思います。基本線はワークショップでも共有した3点、「面白い」「地域性」「祈り」の観点から質問を変えながらうかがえました。[リキ]

9月2日(日)～9月9日(日)

大工さんや、和尚さん、お茶の里記念館の代表の方など、地元の方たちとお話したことは素晴らしいかったです。地域の歴史や、災害の後に感じていること、それでもこの地域に暮らし続けている理由について、より知ることができました。地域の伝統的な歴史やその可能性について見つけ出すのはまだ難しいです。ですが、少なくとも、私たちはこの場所



のアイデンティティを見つけ出しています。[カシア] 今週は、たくさんの方の人たちとお話をすることができました。そして、いかにインタビューや対話を通じて、地域の状況/状態を知ることが重要かをわかった気がします。大工さん、和尚さん、お茶の里記念館の運営者の方など、さまざまな人と出会えたのも嬉しいです。[アルバート]

9月9日(日)～9月12日(水)

先週と同じく、もっと笠原のことを知りたかった私たちは、廃校を訪れたり、天空の茶屋敷のオーナーへのインタビューの計画をしたりしました。学校を訪れたときに一番印象的だったのは、入り口にある石のモニュメントです。開校した日が刻まれているのと同時に、閉校した日も刻まれている。私は悲しく感じました。地域の人たちとの会話を通じて、地域の人々の希望、願い、感情が理解できたように思いました。[アルバート] 今週の日誌担当は私です。少し面倒ではありますが、1日を振り返り、記憶を思い起こすことにもなります。料理の面では、自分たちでお好み焼きを作ってみたりもしました。レストランほどではないですが、おいしい!! [アルバート]



9月13日(木)

活気のあった1日。30人もの九州大学の学生たちと一緒に森に行き、一日中木を切りました。木がしっかりと成長するためには枝を切ることはよいことです。そのあと、山村塾の宮園さんが森林管理についてのレクチャーをしてくれました。[アルバート]



9月14日(金)

パフォーマンスを行う予定の場所に行きました。平らな地形ではないために、普通の民俗芸能よりもずっと難しい状況であることがわかりました。午後にもう一度その場所に行き、練習や議論を重ねました。九州大学の学生さんたちが帰って行って、ふだんのえがおの森に戻りました。ここにいて面白いのは、すべてのことがまるで物語のように起こっているところです。えがおの森は物語を起こさせる、劇場のような場所です。あるときは静かに、あるときは騒がしく、次に何が起こるかは誰も知らない。[アルバート]



9月16日(日)

今日は発表の日。午前中にリハーサルをしましたが、動きが機械的になってしまっはいけないので、あまり長くはやりませんでした。緊張はしませんでした。観客から



のフィードバックはとても素敵で、聞いていて嬉しかったです。パフォーマンスのあとは、未来のアートと農についての景色についてみんなで共有する短いセッションがありました。パフォーマンスとシェアのあと、バーベキューパーティーをしました。すばらしい食べ物とすばらしい会話に、多くの始まりを感じることができました。このワークキャンプは、何年も続けていくことに価値がある。笠原にとって素晴らしいスタートだと思いますし、そうあることを願います。[アルバート]

9月19日(水)

出発しなければならないことに、少し寂しさを感じます。送別会の前にアオちゃん(ヤギ)にサヨナラを言いました。地域のたくさんの方々が、おいしい料理を準備して感謝してくれています。ワークキャンプの最後の瞬間に、すばらしい時間を過ごしています。いつものように、私たちはパーティーのあいだ、いろんな話をしました。漢字の話、未来の話、好きな歌や映画、アニメの話。民俗芸能にも、環境を保つための活動にも、地域とつながることにも、新しい友達をつくることにも、成功したように感じます。この笠原での活動を選び、また選ばれて、本当によかったです。私たちはみんな、笠原の未来を見えています。そしてまた、ここに戻ってくると思います。[アルバート]



撮影：A=アルバート、K=カシア、無印=特例認定NPO法人山村塾

奥八女芸農プロジェクト 成果発表 「現代に民俗芸能をつくる in 笠原」試演 ＋トークイベント

—
9月16日(日)

2018年8月24日より奥八女・笠原地区に滞在した武田力さんは、民俗芸能を新しくこの笠原の地につくる取り組みを行いました。成果発表では、その民俗芸能の試演と、それができるに至った背景をお話する機会を地域に開きました。

民俗芸能といっても、土地によって千差万別。そこで生きていく知恵や後世への祈りなどが、何世代もの祖先を介して独自の発展を遂げながら継がれていくものです。今回は、3人の参加者とともに、地域住民への綿密なフィールドワークを通じ、チェーンソーを用いて杉を切り倒す動作に着想を得ました。できあがったのは、笠原地区で生きる人々の生活に息づく動きをもとに、生活の基盤にある「山への祈り」を込めた表現。これをプロトタイプとして、今後さらに継承し展開していきたい、という地域の方々からの反応がみられました。

参加者：20名 時間：13:30～14:30（試演、トーク含む）
開場：笠原東交流センター「えがおの森」およびその近くの杉林
スタッフ：宮本 聡（SALスタッフ）、特例認定NPO法人山村塾
参加費：無料



撮影(2点とも)：富永 亜紀子

「奥八女芸農プロジェクト」に携わって アート×農

小森 耕太（特例認定NPO法人山村塾事務局長）

九州大学ソーシャルアトラボとの連携は今回で4年目。「奥八女芸農」の名前を使うのは昨年からで、今年からはなんと！山村塾で行っている国際ワークキャンプに「アートプロジェクト」を混ぜ込みました。「アート×農」の可能性をさらに掘り下げて考える取り組みです。具体的には、アーティストの武田力さんにワークキャンプの一員として参加していただき、国際ボランティアのメンバーと寝食をともにしながら、半分の時間を農作業（棚田の保全）、もう半分の時間をアートプロジェクト（笠原の民俗芸能を考える）に取り組んでもらいました。つまりは半農半アートです。

山村塾がはじめて合宿ボランティアを行ったのは、1997年の四季菜館建設直後の「日英合同里山・田園保全ワーキングホリデー（10日間）」で、2007年からは、えがおの森にて80日間の国際ワークキャンプ「里山80日ボランティア」を実施してきました。最初は物珍しかった国際ボランティアも、今ではすっかり地域に馴染み、外国人が棚田で作業していても、地域を散歩していても誰も驚きません。ふつうの風景になりました。

外国人が農村に滞在し、棚田や森林の手入れを行うボランティアとして活動することは、受け入れ側である私たちが、その仕事の意味を丁寧に考え、正しく伝える機会を作り出してくれます。既存のコミュニティの中では慣例や常識に縛られ、特定の意見に引っ張られてしまうことがありますが、多様な年代や性、居住地の人たちが交わることで、お互いを理解し尊重しあうことにつながり、本当に大切なものが何なのか気づかせるように思います。

今年度からスタートした「奥八女芸農ワークキャンプ」では、アートの視点によって、棚田や里山、農山村地域の新たな魅力を見だせたらいいなと考えとともに、アーティストがワークキャンプに参加することで、アーティストとボランティアという「ヨソモノ」が主体性を持って、いろいろな活動を展開してくれることを期待しました。1997年から20年かけて取り組んだ国際ボランティアのように、成果が見えるのはまだ時間がかかるかもしれませんが、「アート×農」の取り組みはまだ始まったばかり。今後が楽しみです。

思考をひらく場としての奥八女芸農プロジェクト

長津 結一郎（SAL教員）

構想した当初からこのプロジェクトでは、参加してくださっている受講生に、「アートとは何か？」「農とは何か？」「アートと農が交わることによる未来は、どのような未来か？」というような問いを投げかけています。この問いに対して受講生は、頭だけで考えるだけでなく、土地に自らの足で入り、においを嗅ぎ、ゆったりとした時間の中で議論することを通じて、自らの言葉として語り出します。奥八女芸農プロジェクトの学びは、そのようなプロセスを通じて、「アート」「農」という言葉に対するボトムアップ的な捉え直しを意図しています。

アートという言葉で想像する「作品」、農という言葉で想像する「作業」ではなく、その奥底にある哲学にじっくりと触れていくこと。根本的な何かを問い直し語り、身をひたすこと。受講生はその経験を持ち帰り、それぞれの活動のヒントや、立ち止まる地点としていただいているように思います。

また、今年初めての試行となった奥八女芸農ワークキャンプは、いくつもの突発的な出来事に見舞われましたが、笠原地区の豊かな人的ネットワークと、招聘したアーティストの武田力さんの包容力に助けられ、多様な可能性がひらかれる日々をつくることができました。

武田力さんは、民俗芸能を「つくる」という試みにあたって、

農山村における新しい芸能の気づき

朝廣 和夫（SAL教員）

今年度の奥八女芸農プロジェクトは、演出家・民俗芸能アーカイバーの武田力氏を八女市黒木町笠原にお招きし、香港、ロシアから参加されたワークキャンプボランティアと半農半アート生活を行い「新しい民俗芸能を創作する」という試みの場となりました。平成24年7月九州北部豪雨から6年。過疎の村の負った傷は深く、村を離れた方も少なくないものの、農地水路は復旧し、農家の生活も落ち着いたという声が聞こえてきます。しかし、何か、ぽっかり穴の開いたような、ただ工事車両の行きかう人の減った村に、農林地に、少し寂しさを感じます。

このようなフェーズの中で地域に残り、復興と生活に汗をされた地元の方は農作業を営みながら、創造的な日々を送られたと思います。地域の新しい取り組みはキラリと光ります。また、「新しく移住されてきた」という話題があると、聞いて嬉しくなるものです。四季の移り変わり、破壊と創造の繰り返し、静かな農山村はダイナミックな場であります。

この笠原の旭座が³伝承する人形浄瑠璃のように、芸能は地域の人々が催す営みであり、また、座が各地域を巡り、よそ

民俗芸能という言葉をも3つの要素で定義しました。「(内輪だとしても)面白いと思えること」「地域性があること」、そして「祈りであること」。この「祈り」というのは、宗教的なものばかりではなく、過去にこの地域に暮らしていた人への祈りかもしれませんし、未来にこの地域に足を踏み入れる人々への祈りかもしれません。ジェームズ・ジャックさんが奥八女芸農学校で行ったワークショップ「渡りゆく物語」も、そうした意味では、あり得る未来においてこの地域が包摂するかもしれない人々に言葉を届ける、そこにいない誰かに思いを馳せる、「祈り」であったかもしれません。

その土地で深く思考することは、今ここで生きている人たちばかりではなく、そこにいない人のことを考えることでもあります。過去へ、現在へ、そして未来へ。平成24年7月九州北部豪雨から復興途上のこの場所で、これからもより深い思考がひらかれる場が続けるとともに、笠原地区であるからこそ生まれる新たな表現の萌芽を、丁寧に育み続けていきたいと考えています。

者が地域を訪れる営みでもありました。アーティストと海外ボランティアによる農作業、創作活動の価値は、このようなコンテキストの中で、「現代に交流と創作の場を再生する」という意味を持つと考えられます。創作された芸能は、針葉樹人工林内でのチェーンソー作業を題材にされた内容でした。静かな舞を鑑賞しながら、地域と過ごされた1カ月の生活の成果とともに、今後の可能性が開かれたように思いました。

本事業は、共創的芸術活動のデザインと人材育成を目的としています。事業の計画、実施に加え、地域の自然や人々とともに、将来像、生活の楽しさ、厳しさ、生業の技術、文化、自然について共に考え、共有し、現在のフェーズを意識しながら創作活動を行うこと。その知見の整理を、今後も実践を重ね検討していきたいと思っています。

公開講座

今年度はシリーズ「アートと社会包摂」と冠し、全4回の公開講座を実施しました。私たちの日々の暮らしの中で、「社会包摂」とはどのような形で存在するのでしょうか。また、「アート」とは、その実現にどのように作用するものなのでしょうか。3つの実践講座とは別の切り口から、多様な事例に触れ、考える機会としました。

第1回と第2回では、障害のある人の表現が社会とつながることについて日本と香港の事例に触れました。第3回では、衝動的な行為から過剰ともいえる表現を生み出す人たちが紹介され、その世界に触れました。第4回では、サンフランシスコの農園で元受刑者や低所得層の人などが育む、自然や他者との共存の美しさに写真を通して触れました。

各講座で実施したアンケートの回答から、講座を通して参加者は「社会包摂」や「アート」について自身の体験や思いと結びつけ、自分の言葉で語るきっかけを得ていたことがうかがえました。

第1回

「障がい者アート」という言葉の背後にあるもの
ドキュメンタリー映像作品「地蔵とリビドー」
上映&トークセッション
7月29日(日)

第2回

「障がい者アート」の可能性 in 香港
i-dArtのユニークな思想と実践
10月22日(月)

第3回

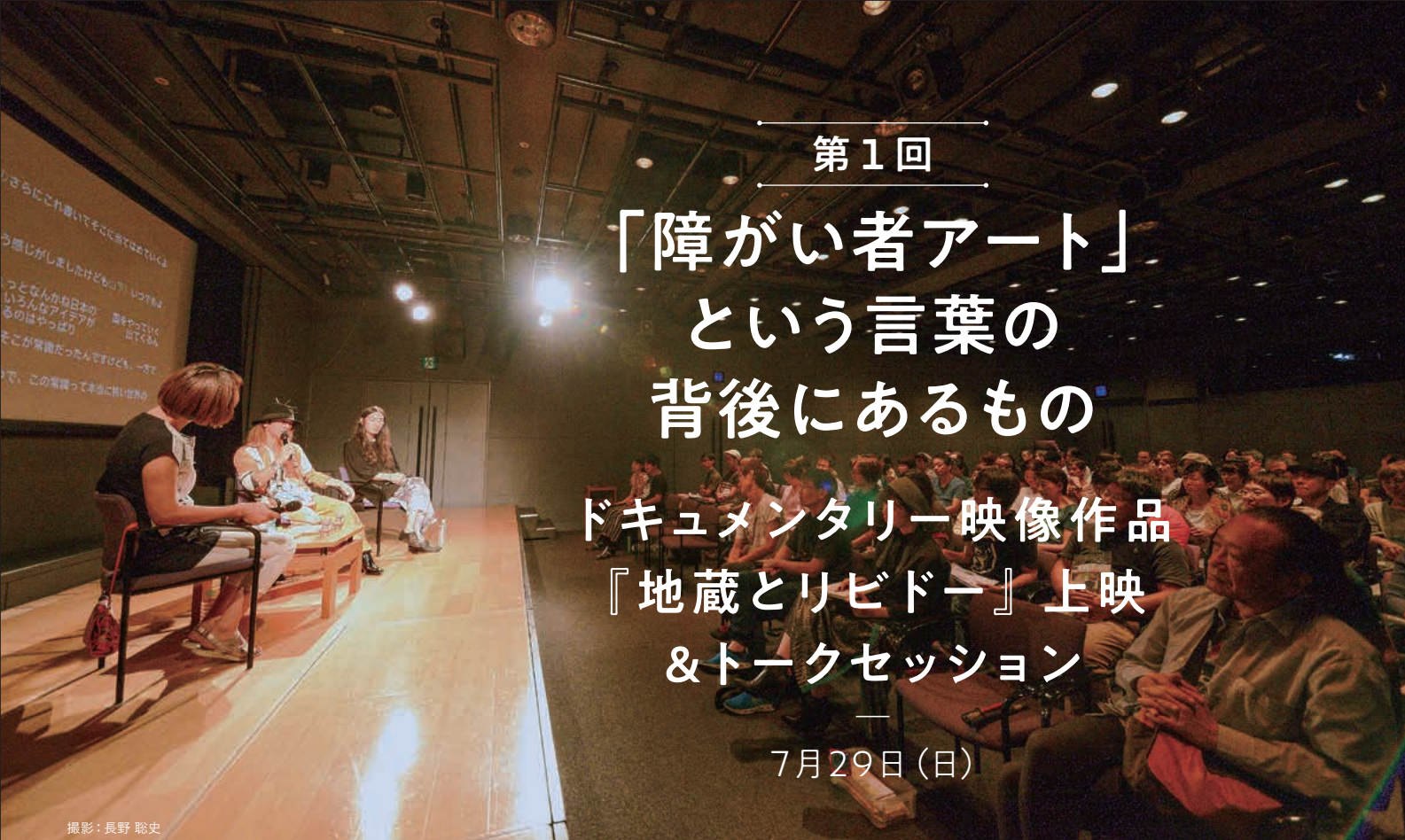
アウトサイダーアートが問いかけるもの
福祉と芸術の狭間から
10月28日(日)

第4回

兼子裕代写真展とトーク
GARDEN PROJECT
光と土ー持続する希望のために
3月23日(土)~29日(金)
※トークイベントは3月23日(土)



撮影(P30-31とも):長野 聡史



撮影：長野 聡史

「障害者アート」という言葉を聞くと、異才を放つ「障害者」がひとりでユニークな「作品」を生み出す姿を思い浮かべる方も多いのではないのでしょうか。しかし多くの場合、障害のある人は孤立した状況ではなく、支援者や周囲の環境との関係性の中で創作活動を行っています。本講座では、「障害者アート」という言葉の背後に隠れている多様な関係性に目を向けることで、「アート」や「社会包摂」のあり方を再考しました。

まず、滋賀県にある障害者支援施設「やまなみ工房」を舞台としたドキュメンタリー映像作品『地蔵とリビドー』（2018年）を鑑賞しました。作品は極力説明やナレーションを省き、音と映像で魅せるつくりがなされています。「ふつうのドキュメンタリーのようににはしたくなかった」という笠谷圭見監督の言葉通り、福祉現場を対象としたドキュメンタリー映画というよりも、映像自体が挑戦的なアート作品だといえます。障害のある人が、好きなことにひたすら打ち込める「やまなみ工房」の日常の中で、「ふつう」じゃないものが生み出され、その美術的な価値が認められることで世界へ羽ばたく様子を、映像は捉えます。同時に、彼らとまわりにいる人たちとの、人と人としてのフラットな関係性を自然に、そして至極当然のものとして映し出しています。何より、登場する「障害者」の人としての圧倒的なかっこよさ・存在感が、観る者の心に響きます。

休憩を挟み、笠谷監督とやまなみ工房の山下完和施設長をむかえ、トークセッションを行いました。映像作品を制作する際の裏話をはじめ、6年間の共同プロジェクト

「DISTORTION（ディストーション）」により築いてきたお二人の関係性や、役割の違いが生み出した成果などが話されました。特に、プロジェクトを行う中で現れた「カッコいい人」としての障害者の姿に、「障害」に対する概念（思い込み）が揺さぶられたというエピソードは、参加者の強い共感を得ました。

また、施設での活動が「アート」として脚光をあびていることについて、山下施設長は「やまなみ工房」としてのスタンスはずっと変わっていないといいます。近年アート関係者により、アートとして価値づけされたために、世の中の受け止め方が変わってきたのであり、障害のある彼らがやっていることは30年前とそんなに変わっていないのです。

質問の時間には会場からも、活動の推進が進むにつれ経済的な効果を重視する傾向が生じることにに対する危惧や、福祉を学ぶことで生じる「支援者」と「障害者」という関係性に対する弊害などについて意見があり、活発な議論が行われました。

本講座を通し、笠谷監督と山下施設長の6年に渡る挑戦の中に、多様な背景を持つ人が多様なまま共に生きる社会のあり方について、ひとつのイメージを見ることができました。特徴的だったのは、お二人とも型に沿った活動を展開するのではなく、目の前にいる人、または生まれた表現を起点に、その魅力が一番発揮される方法を都度考えながら柔軟に展開している点です。どれだけ一般常識に捉われず本当に大切にすべきことを認識し、展開する行動力が持てるか、障害のある人以上に周囲にいる人のあり方が問われるといえます。



撮影（3点とも）：長野 聡史

参加者：98名 時間：13:00～16:30（12:30開場）
会場：福岡アジア美術館 あじびホール 受講・鑑賞料：1000円
コーディネーター：中村 美亜（SAL教員） 全体進行：村谷 つかさ（SALスタッフ）
UDトーク：後藤 渚（九州大学大学院芸術工学府）、川上 里以菜（九州大学芸術工学部）
スタッフ：諏訪 睦（RISSI INC.）、金子 真紀（九州大学大学院人間環境学府）、
許 昊（九州大学大学院芸術工学府）、梶原 慶子、長津 結一郎（SAL教員）、
宮本 聡（SALスタッフ）

登壇者プロフィール

笠谷 圭見（かさに よしあき）
RISSI INC. クリエイティブディレクター
障害者施設で生み出される創作物の魅力を社会に発信するプロジェクト「PR-y」を主宰し、国内外のギャラリーや研究機関・教育機関などとの橋渡しを手がける。2013年より「DISTORTION」というコンセプトワードを掲げ、写真・映像・ファッション・インスタレーションなど、さまざまな領域で障害者とのコラボレーションによる表現活動を行っている。



山下 完和（やました まさと）
社会福祉法人やまなみ会 やまなみ工房施設長
高校卒業後、フリーとしてさまざまな職種を経た後、1989年から、障害者無認可作業所「やまなみ共同作業所」に支援員として勤務。1990年に「アトリエころぼくる」を立ち上げ、互いの人間関係や信頼関係を大切に、一人ひとりの思いやペースに沿って、伸びやかに、個性豊かに自分らしく生きる事を目的にさまざまな活動に取り組む。2008年より現職。



参加者アンケートより

「アート」に対する認識の変化

- ◆「特別な作品」のことをアートと考えていましたが、人（←障害の有無）が日常的に作業する中で他人が「面白い!」と心動かされるものはアートとなりうると思いました。
- ◆正しいとか正しくないとか、出来がいいとか悪いとかあんまり関係ないかも、と思いました。自分が肯定できること、その作品を肯定した自分を肯定することが大切なのではないかと思います。
- ◆アートは“作品”というよりもふだん言葉を話す、呼吸する、日常でやることの延長だと思いました。それが、作品になるか（評価されるか）どうかはその先にあるかと。
- ◆アートは薬よりも効く、という言葉が心に残りました。歌うとか踊るとか絵を描くとか作るとかは人間が生きていくうえで、思っている以上に重要なことかもしれないと思いました。

「社会包摂」に対する認識の変化

- ◆今日に限っては、の話ですが、マジョリティ⇔マイノリティ、包摂する/されるという概念が物足りない、というか、その尺度ってどうなのかなというのが感想です。もう少し、“多様な人が多様に生活できる社会”を作る/考えるうえで、新たな言葉/概念が必要なのかも。
- ◆マジョリティ、マイノリティに関わらず、それぞれが人生に楽しみを見つけて生きていける社会を作ることが「社会包摂」なのかと思いました。受講前は「社会包摂」をどういう風に捉えていいイメージでできませんでした。

「社会包摂につながるアート」に対する認識の変化

- ◆福祉に対しまったく興味なかった頃こそ「障害者としてくっついていることこそがそもそもおかしい!!!」と思っていたのに、施設で働き始めて障害に目を向けてしまっていたと改めて、最初の視点に戻りたいと思いました。

地蔵とリビドー [2018年・日本・62分]

知的障害や精神疾患を持つアーティストたちによる創作物の魅力を、アウトサイダーアートに造詣の深いジャーナリストや美術関係者などのインタビューを交えて紹介するドキュメンタリー映像作品。



監督：笠谷 圭見 撮影・編集：野田 亮
キャスト：小出 由紀子、エドワード・M・ゴメス、
中津川 浩章、向井 秀徳 ほか
<https://www.jizolibido.com>

- ◆どこかで相手のことを優先して考えなくてはならないことだと思っていました。自分の感覚、視点で多様な社会と関わることに焦点を合わせてもいいのだと感じました。

その他

- ◆もともと、押し付けられたり、鋳型にはめられることに強い反発を感じながら我慢している自分が嫌であったし、自分が自分らしくあることに自信のない私がいたが、抑圧された自分自身を解放する内容だった。
- ◆受講前は、もう少し“お固い”内容かと思っていました。「アート」や「社会包摂」についても、四角く捉えていたように思いました。もっと自由さがあっていいと思うし、自由さこそが「包摂」だと思いました。（＝不自由さの一因には「お金」という問題があると思いました。）



撮影：松浦 ちひろ

香港で150年の歴史を持つNGO東華三院では、障害のある人たちを「異なる能力を持つ人」(People with different abilities)と呼びます。本講座では、東華三院が行うユニークなアートプログラム、“i-dArt”(アイ・ディー・アート)を運営するヤン・メーリンさん(管理補佐)とユ・ベリーニさん(シニアアート・ディベロップメント・オフィサー)を迎え、香港の「障害者アート」を巡る現状や、i-dArtでの挑戦的な取り組みについてお話をうかがいました。また、3カ月間この施設に住み込み、i-dArtと実験的なパフォーマンスを繰り広げた作曲家の野村誠さんにも、現地での活動の様子を紹介していただきました。

まずはメーリンさんに、i-dArtが行われているTWGHs Jockey Club Rehabilitation Complex (JCRC)を紹介していただきました。この施設は、知的障害者、精神障害者、視覚障害のある高齢者などが利用し、入所者・通所利用者・スタッフがおよそ1000人ずつおり、5つの高層ビルの中に42のセクションがあるという超巨大施設です。各セクションでは、理学療法や職業訓練のほか、ロボットやVRなど最新テクノロジーの活用、尊厳を大切にしたい終末期のケアなど多岐に渡るプログラムが実施されています。また、知的障害のある人が車いす利用者の移動介助をするなど、各人が持つ能力を活かして生活する環境がつくられています。アートプログラムも、その方針の中で実施されていることがうかがえました。

次に、ベリーニさんにi-dArtの10年に渡る取り組みをご紹介いただきました。i-dArtでは障害のある人が美術を総合的に学ぶ4年間のコースが組まれています。講師は単に絵の描き方を教えるのではなく、各人の個性にあった表現につながるように、試行錯誤しながらカリキュラムを作っていま

す。コースを修了した人の中には、たとえば香港のTV番組の様子を描いた作品100点がTV局内に展示されたり、局のキャラクター制作の依頼を受けるなど社会で活躍する人も現れています。i-dArtの活動では、「異なる能力を持つ人」の存在を通して障害の有無に関わらず、私たちみんなが持っている異なる能力を発揮して生きる社会の実現を目指しています。日本と交流しながら推進したいと力強く語られました。

野村さんには、i-dArtでの3カ月間に渡るアーティスト・イン・レジデンスの様子をお話いただきました。温浴治療するプールやキッチンなども活用して、楽器や言葉、身体の動きなどのインターアクションによるセッションを行い、19種類ものプロジェクトを実施したそうです。最後のプロジェクトではトラム(路面電車)を貸し切り、オープンになっている2階部分で選抜メンバーと演奏しながら香港の街を疾走したとのこと。そのときの映像からは、トラムの乗車経験すらなかったメンバーが生き生きと演奏する姿を見て、最初は心配していた支援者や沿道に駆けつけた声援部隊(ボランティア!)も大いに盛り上がり楽しんだ様子がうかがえました。

会場との意見交換では、日本と香港の障害者施策の違いや、人口密度の差から生じる「地域」の持つ意味の違いに関する指摘があった一方、活動により実現したい社会のあり方は両者とも共通しているという点についても話がおよびました。また、i-dArtのこれまでの活動によって、介護スタッフが障害のある人たちの可能性に目を向けるようになっており、このような周囲の人の変化こそ、社会が変わっていく一歩になるという意見も出されました。国や地域を超え、同じ思いを持って活動続けることで大きな力になっていく、そんな予兆を感じさせる会となりました。



香港のトラム(路面電車)での演奏の様子

写真提供：i-dArt



撮影(上2点)：松浦 ちひろ

参加者：26名 時間：19:00~20:30 (18:45開場) 会場：九州大学大橋キャンパス デザインコモン2階 参加費：無料
通訳：Low Ze Han/ロウ・ゼ・ハン(九州大学大学院人間環境学府) モデレーター：村谷 つかさ(SALスタッフ)
スタッフ：長津 結一郎(SAL教員)、宮本 聡(SALスタッフ)
UDトーク：後藤 渚(九州大学大学院芸術工学部)、川上 里以菜(九州大学芸術工学部)
協力：九州大学キャンパスライフ・健康支援センター インクルージョン支援推進室

登壇者プロフィール

YEUNG Mee-ling(ヤン・メーリン)
東華三院 管理補佐
10年前にi-dArtを設立し、「異なる能力を持つ人」のための芸術活動に取り組んでいる。TWGHs Jockey Club Rehabilitation Complex (JCRC)のソーシャルワーカーであり、管理補佐を担う。



YU Bellini Guy Tse(ユ・ベリーニ・ガイ・テス)
東華三院 シニアアート・ディベロップメント・オフィサー
i-dArtの設立と発展に関わる中、アートの可能性も探り続けている。ソーシャルリー・エンゲージド・プラクティショナー(社会的関与の実践者)。



野村 誠(のむら まこと)
→P15参照



参加者アンケートより

「アート」に対する認識の変化

- ◆即興演奏を聴いて、偶然性の音楽は意外とありだなと思った。何より楽しそう。
- ◆自分の能力を最大限に活かしたアートは魅力的なものであると感じた。実際のワークショップの動画を見て、さまざまなアートの種類があると再認識した。
- ◆どんな能力・身体の人でもその人なりにできること。
- ◆「周囲の人の『見方』を変える」は、とても印象的でした。

「社会包摂」に対する認識の変化

- ◆障害のない人も障害のある人に助けられる。そのようなことも考えられると本来の「社会包摂」はそのようなものだと思うようになった。香港の障害のある人たちどうしが助けあう場を作っているという説明を聞いて、共に生きるということの姿を考えたことが、考え方が変化したきっかけです。
- ◆意味がわかりませんでした。多様性の理解とお互いの協力でよりよい社会が作れると思

いました。

- ◆国ごとの福祉の状況によってアプローチも変わるのかなと感じます。ただ目指しているものは筋が通っていて目標の共有がなされているのかなと感じました。

「社会包摂につながるアート」に対する認識の変化

- ◆社会包摂になる面は作品の制作だけではなく、さまざまな段階で生じると感じました。特にパブリックアートのような形でイベントとして行うことも包摂として強い機能があるように感じました。
- ◆ability(可能性)を光らせるには、支援者なり指導者のファシリテーション力が大きいことがわかりました。とはいえ、野村さんにすべての施設を訪れていただくわけにもいかないので、どうすれば良いんだろうと思いました。
- ◆認識はとくに変わらず。野村誠さんの3カ月の試み(ワークショップ)の中身(そしてその効果について)を聞いたのは、とても良かったです。アーティスト・イン・レジデンスは初回だったとのことなので、今後継続させて別のアーティストがどんどん来て、どのような変

化があるか気になります。その時また話を聞きたい。

- ◆今回のイベントを通して、日本の特徴(地域福祉・コミュニティベースの活動)を感じたように思います。また、福祉施設にアーティストが来る/そこで、3カ月活動することは、あまり聞いたことがなく、その活動に関心を持ちました。
- ◆表現と挑戦するプロセスのアートと考えた場合、どのような立場のひとつも、一緒に表現するという機会を持つことは、感情や感覚を共有することになるので、アート活動は社会包摂につながるものだと思いが広がった。
- ◆香港での皆(障害をもっている)のアート活動、違う障害を持った人たちが一緒に表現活動をしているビデオを見て、そのようなことができると思ったことが、少し変化するきっかけになった
- ◆障害者の人々が社会とつながるきっかけ。
- ◆高次元なものでなく誰もがすることにつながるもの。

第3回

アウトサイダーアートが問いかけるもの 福祉と芸術の狭間から

〈糸島芸農2018実行委員会とのコラボ企画〉

10月28日(日)



2018年の糸島国際芸術祭(糸島芸農)最終日に、アウトサイダー・キュレーターの榎野展正さんを迎え、トークセッションを開催しました。会場となった松末権九郎稲荷神社拝殿には、満員となる50人超の来場者が集まり、始まる前から熱気に包まれました。今回の糸島芸農のテーマは「マレビトの通り道」。民俗学者の折口信夫は、マレビト(稀人・客人)を、海の彼方から村人の生活を幸福にして帰る^{みたま}霊と表現しました。アウトサイダー・アーティストもまた、マレビトと呼ぶのにふさわしい人たちかもしれません。

榎野さんは、大学卒業後に知的障害者支援施設において職員として働くなか、障害のある人たちの表現活動に深く関わることになりました。その後、^{ともつ}糸の津ミュージアム(広島県福山市)のキュレーターを経て、2016年にアウトサイダー・アート専門のギャラリー「クシノテラス」をオープンしています。アウトサイダー・アートという日本では、障害のある人たちの作品を思い浮かべる人も多いと思います。しかし障害の有無に関わらず、社会の周縁において、他人からの評価を期待するでもなく、やむにやまれぬ衝動から表現し続ける人たちが存在しています。クシノテラスでは、そのような人たちの表現に焦点をあて、社会に広く紹介しています。

今回のトークセッションでは、福岡での開催にちなみ、福岡県内在住のアウトサイダー・アーティストが取り上げられました。福岡市内にある超ユニークな内装の美容院「ペロペディール」、愛用の自転車で久留米中をめぐる「カラフルおじさん」、昭和B級エロ雑誌などを収集し「奇書ハンター」として知られる小倉の若い女性、北九州市にいる「スーパーデコチャリ青年」(「デコチャリ」とはデコレーション・チャリンコの略)……。来場者は、次々に紹介される写真や映像に、「自分たちの周りにもこんなにいるのか」と驚嘆していました。またこの日は、トークで取り上げられたアーティストの一人である「妄想スクラップ職人」の遠藤文裕さんも、作品とともに会場に駆けつけてくれました。

紹介されるアーティストたちは、いずれも過剰で最初は滑稽に思えるのですが、榎野さんの話を聞いていると、だんだん温かい気持ちになってきました。一見、何の得にもならないようなことでも、情熱を持ち、全精力を傾けた人たちの行為や、それによって形づくられたものは、不思議な力を持っています。来場者の中には、アーティストたちのそんな姿に「正直に生きればいいんだ」と声をかけられ、勇気づけられたと感じた人も少なくなかったことでしょう。

参加者：54名 時間：14:00～15:40(13:30開場) 場所：松末権九郎稲荷神社拝殿(福岡県糸島市二丈松末)
入場料：無料(要「糸島芸農」観覧チケット)
司会：中村 美亜(SAL教員) スタッフ：長津 結一郎(SAL教員)、宮本 聡(SALスタッフ)

登壇者プロフィール

榎野 展正(くしの のぶまさ)

クシノテラス主宰、アウトサイダー・キュレーター
1976年生まれ、広島県在住。2000年より知的障害者福祉施設職員として働きながら、広島県福山市鞆の浦にある「鞆の津ミュージアム」でキュレーターを担当。2016年4月よりアウトサイダー・アート専門ギャラリー「クシノテラス」オープンのため独立。社会の周縁で表現を行う人たちに焦点を当て、全国各地の取材を続けている。近著に『アウトサイド・ジャパン 日本のアウトサイダー・アート』(イースト・プレス)。「クシノテラス」ウェブサイト <http://kushiterr.com>



糸島国際芸術祭(糸島芸農)とは

福岡大都市圏の西側に隣接する糸島は、美しい自然と豊かな農業などの生産現場に恵まれています。この糸島で2012年よりはじまった糸島芸農は、アートの可能性に注目し、糸島の魅力を再発見し、生活と密着したアートのあり方を提示していくことを目的にした国際芸術祭です。2年に一度のビエンナーレ形式で開催されています。

「糸島芸農」ウェブサイト <https://www.ito-artsfarm.com>

参加者アンケートより

「アート」に対する認識の変化

- ◆これもアートなんだと認識が広がりました。
- ◆アール・ブリュットを国が支援していること。インサイドとアウトサイドという言葉がなくなったらいいなと思いました。それを意識させない展覧会が見たい。
- ◆身近かと思っていたものが少し遠のいた。
- ◆必ずしも社会に対する政治的な意図が必要なのではないと感じた。
- ◆アートは社会とつながる可能性を与えてくれる。
- ◆自分の心を満たすものなのかなと思った。
- ◆他人に「見せる」ものじゃない。表現者本人が自分の好きなものを楽しんでいる。

「社会包摂」に対する認識の変化

- ◆社会の中で自身のこだわりを持って自身のアートを創り続けている人々が大勢いるんだな～と思いました。考えてみれば当たり前のこと。
- ◆何が社会包摂なのかよくわからなくなりました。
- ◆アウトサイダーという言葉で対象となった障害者の方以外にもさまざまなマイノリティがいることを知りました。
- ◆どのように光をあてるか、発掘するか、単純に面白かった。
- ◆言葉を知って、当たり前のことだと感じた。

個であることを考えると、それぞれがマイノリティ。

- ◆そこに存在している、包摂しなくとも。
- ◆マイノリティと言われることが生きづらいではなく、発表の場があってほしい。
- ◆「社会包摂につながるアート」に対する認識の変化
- ◆過剰性は面白い、ただ、表現者の気持ちに配慮しながらすることに絶妙なバランスを感じました。
- ◆アートによって包摂される人々として、障害者等を想定していたが、すぐ隣の人も包摂されるのだと思うようになった。
- ◆障害者アートがブームとして捉えられる現場に違和感を覚えていた。今はメーターを振り切った人々と考えたらパワーがすごいです。
- ◆「なき存在をあるものに変える」という言葉で変化しました。

その他

- ◆私は、筑後地方(久留米)で育ってきたので、はみ出しものたち(アウトサイダー)が身近にいる環境でした。本人たちはとてもかっこいいと思って生きていました。はみ出しものが社会的包摂として社会と接点を持つには、それを見つけてくれる人、その表現に価値を見出してくれる人がいること、その表現にあら

ゆる視点から光をあてることが重要なのだな、と思いました。

- ◆ジャーナリスト、しかり、経済の面とのアートの関わりを考えたい。
- ◆作品を理解しやすくするために作者の背景を説明するというよりも作品(制作物)を紹介することによって人物を理解しやすくしているように感じ、それが印象的でした。美術というのが必ず紹介者を介在して成立するものなのか、存在自体で成立するものなのか考えさせられました。非常によい機会でした。



第4回

兼子裕代写真展とトーク GARDEN PROJECT 光と土―持続する希望のために

3月23日(土)～29日(金)

ガーデン・プロジェクトは、アフリカ系アメリカ人の弁護士キャサリン・スニードが1992年に始めたNPOです。サンフランシスコ郡刑務所第5庁舎に隣接した広大な敷地で畑と園芸を運営し、元受刑者や低所得者、家庭環境に問題を抱える若者たちとともに農作業を行っています。

ガーデン・プロジェクトで働く人々の動き、光や風、木々や花、土地から受け取る自然のエネルギー……。それらの瞬間を切り取り、自然や他者との共存の美しさを浮かび上がらせた、写真家・兼子裕代さんの写真展を開催しました。

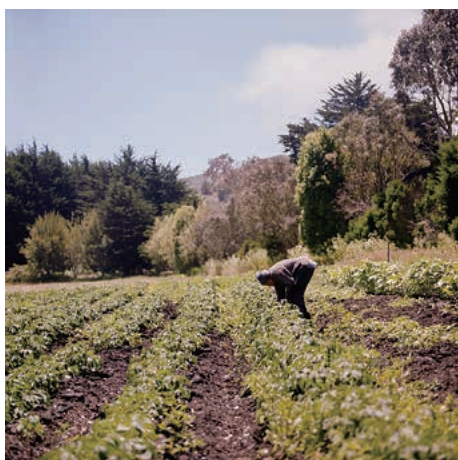
初日には兼子さんに加え、写真研究者の小林美香さん、自然と学びに関して活動する大松くみこさんを迎えトークを行いました。異なる背景を持つ人たちが共に生きる社会の実現について、人と人、人と自然の関係性に目を向けることでヒントを得ました。

時間：11:00～19:00 (初日13:30開始、最終日16:00終了)
会場：九州大学大橋キャンパスデザインコモン2階 入場：無料
※トークイベント 3月23日(土) 14:00～17:00 (13:30開場) 定員：30名
コーディネーター：中村 美亜 (SAL教員) 全体進行：村谷 つかさ (SALスタッフ)

作家プロフィール

兼子 裕代(かねこ ひろよ)

写真家、デアンザ・カレッジ芸術学部写真学科非常勤講師
1963年青森県生まれ。現在、カリフォルニア州オークランド在住。明治学院大学文学部フランス文学科卒業後、会社員を経てイギリス・ロンドンで写真を学ぶ。1998年より写真家、ライターとして活動。2003年サンフランシスコ・アート・インスティテュート大学院に留学、2005年同校写真科修士課程修了。2009年に家族の入浴を撮った「センチメンタル・エデュケーション」でアメリカ新人作家に送られるサンタフェ写真賞受賞。2019年秋には歌う人のポートレート・シリーズ『アピアランス』刊行予定。



トークイベント登壇者プロフィール

小林 美香(こばやし みか)

写真研究者・東京国立近代美術館客員研究員
国内外の各種学校・機関で写真に関するレクチャー、ワークショップ、展覧会を企画、雑誌に寄稿。2007-08年にAsian Cultural Councilの招聘、およびPatterson Fellowとしてアメリカに滞在し、国際写真センター(ICP)およびサンフランシスコ近代美術館で日本の写真を紹介する展覧会・研究活動に従事。2010年より東京国立近代美術館客員研究員、2014年から東京工芸大学非常勤講師を務める。



大松 くみこ(おおまつ くみこ)

NPO法人産の森学舎事務局長・みつばちおうちえん園長
1980年、福岡市生まれ。慶應義塾大学総合政策学部卒業。2008年より糸島在住。第一子妊娠を機に食・子育て・社会問題への意識が変わる。2011年、友人らと子どもと自然な暮らしを楽しむ「みつばちおうちえん」を設立。2015年、夫らと「産の森学舎」設立。豊かな自然の中、クリエイティブな学びを行うスタイルは多様な学びの場の一つとして注目を集める。



兼子裕代写真展の展示作品より(3点とも)

「アート」を通して日常を問いなおす

村谷 つかさ (SALスタッフ)

今年度実施した公開講座はどれも、私たちがふだんは意識を向けにくい感覚や考え方に向き合い、見つめ直すきっかけを与えてくれるものでした。講師の方々のお話からは、作品の魅力だけではなく、その背後にある関わりあう人たちの関係性や日々の営みを感じることができました。参加者からも、アートは特別なものと感じていたけど日常にあるものと思うようになったという言葉が聞かれました。ここでは、私たちの日常とアートについて、少し思いを巡らせてみたいと思います。

講座の共通したテーマは「アートと社会包摂」でしたが、「アート」のあり方は、各回で少しずつ違っていたと思います。やまなみ工房では、障害のある人が好きなことに好きなだけ取り組める日常の中、結果として生まれるものが外部からはアート(作品)として評価されています。アート(作品)は結果の一部であり、はじめから目指されている目的ではありません。i-dArtでは、アート(芸術的表現手法)を戦略的に活用することで、知的障害のある人が個別の能力をいかして生きていける環境をつくらうとしています。クシノテラスでは、ユニークな表現をアウトサイダー・アートというアート(美術)の文脈で捉えることで、私たちの日常に存在する多様な生き方を鮮やかに浮かび上がらせています。また、3月末に実施した写真展では、アーティストがGARDEN PROJECTに関わる中で、そこで営まれる人と人、人と自然の生の瞬間を映し出しています。

アートは色々な意味を持ち、作品や芸術的表現手法など多様なカタチで存在します。講師ごとに、アートとの関わりや活動のあり方は異なりますが、核となる大切なことには共通点もみられます。それは、一般に常識とされる状況からではなく、目の前にいる人や状況を始点として思考や活動を展開している点でしょう。もちろん常識に疑問をもつということは、簡単なことではないはず。各講師はそれぞれの活動

領域において、常識とされていることに対する違和感に真摯に向き合い、大きなエネルギーを注いで日常のあり方に変化を与えようとしています。

私自身も、障害者支援施設で知的障害のある人のケアと創作活動に長年携わってきました。その活動では作品をつくることよりも、一人ひとりが好きなものや好きな動きを通して、感情やエネルギーが身体から表れ出るような時間や環境づくりを大切にしました。感情やエネルギーの表出は特別な才能がなくても誰にでもできることなので、表現の可能性はみんな持っているといえます。そのような活動によって生じるダイナミズムは、かたちとして残る作品以上に意味深いものでした。活動を通した本人の変化、身近な人の変化、もっと広い範囲での人とのつながりや意識の変化など、「障害のある人」と「表現(者)に魅力を感じた人」との間で影響しあう相互作用の可能性の大きさを実感しました。

そのような経験から活動で大切なのは、アートを通してこれまで接点のなかった他者の存在や価値観に気づき、自身の常識を問い直し、お互いに影響しあいながら新たな関係性や価値を築いていくことだと考えています。そのきっかけとなるなら、必ずしもアートと呼ばれるものでなくてもいいのかもしれない。アンケートの回答で「アート」「社会包摂」「社会包摂につながるアート」に対する認識の変化について、参加者が自身の日常経験と結びつけ、自分の言葉で語りなおし、課題を抱えた他者ではなく他ならぬ自分自身も関わることで言葉紡いでいたことは興味深いものでした。日常は人の数だけあるということは、当たり前聞こえるでしょう。しかしその時、同じ日常を生きている多様な他者を想像できているでしょうか。身近にある他者の日常を知り、その次の一歩をどう踏み出せるか、今後も皆さんと一緒に考えていきたいと思います。

教材開発

九州大学ソーシャルアートラボは、2018年1月から文化庁と「文化芸術による社会包摂の在り方」に関する共同研究を開始しました（「文化庁と大学・研究機関等との共同研究事業」）。研究チームは、文化庁の職員4名、ソーシャルアートラボのメンバー4名、外部アドバイザー3名、事務局1名で構成されています（表1）。調査研究を実施し、文化や福祉に携わる行政や団体の職員、社会包摂に関心のあるアーティストなど、公共政策に関わる人を主なターゲットとしたハンドブックを作成することを目標に定めました。

この共同研究事業は、本事業の「教材開発」と連携した形で進められています。平成30年度には、まず社会包摂に関連した政策の調査、海外事例の調査を行い、現状の課題と解決の方法を探るため23人（省庁自治体職員、事業実施団体・中間支援組織職員、個人事業主・アーティスト、専門家など）へのインタビュー調査を実施しました。インタビューでは経験の豊かな人と経験の浅い人の双方に話を聞くことで、課題を同定しながら解決法を抽出することを試みました。また、日本文化政策学会第12回年次研究大会で公開シンポジウム、大阪のアートエリアB1や東京のKOGANEI ART SPOT シャトー2Fで公開研究会を実施し、研究に関するフィードバックを得ました。

これらを踏まえながら、研究会（全7回）でハンドブックの内容について議論を重ね、『はじめての“社会包摂×文化芸術”ハンドブック 一人ひとりに向きあい共に生きる社会をつくる』を作成しました。

〔表1〕文化庁×九州大学 共同研究チームのメンバー

文化庁

朝倉 由希（文化庁地域文化創生本部 総括・政策研究グループ 研究官）
青柴 勝（文化庁地域文化創生本部 総括・政策研究グループ 調査役）
塩田 英登（文化庁地域文化創生本部 総括・政策研究グループ チーフ）
野中 宏美（文化庁地域文化創生本部 総括・政策研究グループ スタッフ）

九州大学ソーシャルアートラボ

中村 美亜（SAL 教員）〔研究代表者、第1章執筆担当〕
長津 結一郎（SAL 教員）〔第2章執筆担当〕
村谷 つかさ（SAL スタッフ）〔第4章執筆担当〕
宮本 聡（SAL スタッフ）

アドバイザー

大澤 寅雄（㈱ニッセイ基礎研究所 芸術文化プロジェクト室 主任研究員）
山内 泰（NPO 法人ドネルモ 代表理事）
宮田 智史（NPO 法人ドネルモ 事務局長）〔第3章執筆・編集担当〕

事務局

櫻井 香那（NPO 法人ドネルモ スタッフ）〔第3章執筆・編集担当〕



■タイトル

文化庁×九州大学共同研究チーム 編

『はじめての“社会包摂×文化芸術”ハンドブック
一人ひとりに向きあい共に生きる社会をつくる』

■主な対象

- 文化行政に携わっている人
- 公共政策に関わりながら芸術活動を行っている人
- 共生社会の実現に広く関心のある人

■構成

- 第1章 社会包摂につながる芸術活動とは
（背景知識、考え方、取り組む際の要点など）
- 第2章 活動から生まれること
（創造、発表、交流など芸術活動に特有の機能や想定される成果など）
- 第3章 取り組みの紹介
（全国のユニークな取り組みを紹介）
- 第4章 行政と現場のコミュニケーション
（コミュニケーションを円滑にするコツなど）

ほか

■仕様

A5 版、68 ページ（イラスト、写真つき）

■編集協力

- 編集：NPO 法人ドネルモ
- デザイン：長末 香織

●ハンドブックの PDF 版は、次の URL でダウンロードすることができます

<http://www.sal.design.kyushu-u.ac.jp/publications.html>

ハンドブック制作の流れ

1 作業プロセス

4月～8月 政策調査（本研究に関する文化庁の条文、総務省、外務省、ユネスコなどの法律・条約・条例の文言を精査し、用語や概念を整理）、海外事例の調査（イギリスのブリティッシュ・カウンシルやクリエイティブ・スコットランドの取り組みなど）

7月～11月 インタビュー調査（省庁自治体職員、事業実施団体・中間支援組織職員、個人事業主・アーティスト、専門家など15団体・23名にインタビュー）

質問内容は、アートに関する考え、社会包摂に関する考え、社会包摂につながるアートに関する考え、行政と事業実施現場のコミュニケーションに対する考え、評価に対する考え、政策や補助金に対する考えなど

11月～2月 ハンドブック作成（原稿執筆、デザイン、校正）

3月29日 ハンドブック発行



インタビュー調査の様子

2 公開研究会等

11月24日（土）

公開フォーラム（九州大学大橋キャンパス）

【日本文化政策学会第12回年次研究大会のシンポジウムとして開催】

テーマ：社会包摂を目指した文化芸術事業・施策の評価～社会デザインの観点から

パネリスト：朝倉 由希「文化庁の対応状況とこれからの施策」

長津 結一郎「近年の障害者芸術の動向～厚生労働省の施策を事例として」

中村 美亜「社会包摂と文化芸術をめぐる論点整理～ハンドブック作成に向けて」

ディスカッサント：中川 幾郎（帝塚山大学名誉教授）

主催：日本文化政策学会、九州大学ソーシャルアトラポ（シンポジウムのみ）

音響：九州大学芸術工学部 TRP（テープ・レコード・プレイ）

照明：九州大学芸術工学部照明屋

映像投影：九州大学芸術工学部 Rec-lab

UDトーク：中山 博晶（九州大学大学院人間環境学府）、川上 里以葉（九州大学芸術工学部）

協力：九州大学キャンパスライフ・健康支援センター インクルージョン支援推進室、福岡市聴覚障がい者情報センター

※芸術工学50周年記念行事の一環として開催

2月3日（日）

公開研究会（大阪、京阪電車なにわ橋駅 アートエリアB1）

テーマ：アートと社会包摂～ソーシャルアートってどんなもの？

登壇者：中西 美穂（大阪アーツカウンシル統括責任者）、ほんま なほ（大阪大学COデザインセンター教員）、中村 美亜（SAL教員）、長津 結一郎（SAL教員）

主催：九州大学ソーシャルアトラポ、アートエリアB1

企画制作：大阪大学共創機構社会学共創本部21世紀懐徳堂、NPO法人ダンスボックス

3月17日（日）

公開研究会（東京、KOGANEI ART SPOT シャトー2F）

テーマ：表現、記憶、コミュニティ

登壇者：アサダ ワタル（文化活動家・大阪市立大学都市研究プラザ特別研究員）、中村 美亜（SAL教員）、長津 結一郎（SAL教員）

協力：春々堂、NPO法人アートフル・アクション



11月24日の公開フォーラム

写真提供：日本文化政策学会第12回年次研究大会実行委員会



2月3日大阪での公開研究会。ハンドブック案についてのフィードバックとディスカッション
撮影（2点とも）：渭東 節江

3 研究会

第1回研究会

◇日時：9月6日（木）15:00～18:00

◇出席者：10名

朝倉、青柴、野中、中村、長津、村谷、宮本、大澤、山内、宮田

◇議題

- 1) 政策調査の報告（文化庁の条文、総務省、外務省、ユネスコなどの法律・条約・条例の文言を精査し、用語や概念を整理）
- 2) インタビュー調査の報告（現段階で5名のインタビューが終了。今後の対象者の報告、検討など）
- 3) ハンドブック作成の方針検討（コンセプト、デザインなど）

第2回研究会

◇日時：10月19日（金）15:00～18:00

◇出席者：8名

青柴、塩田、中村、長津、村谷、宮本、大澤、宮田

◇議題

- 1) 年内スケジュールの確認（制作：内容確定～原稿完成～レイアウト～初校～入稿～納品／研究会：12月、1月、2月）
- 2) インタビュー内容の共有（現段階で終了した15団体・22名〔行政関係者、中間支援団体、アート関係者、専門家〕の内容報告、検討など）
- 3) ハンドブックの内容検討（現状の目次案の提出、組立て、デザイン、情報発信の仕方や目的など）

第3回研究会

◇日時：12月3日（月）15:00～18:00

◇出席者：9名

青柴、塩田、中村、長津、村谷、宮本、大澤、宮田、櫻井

◇議題

- 1) 日本文化政策学会（11月24日）の報告（感想の共有）
- 2) 今後のスケジュール（ハンドブックの内容についてのチェック時期の確認など）
- 3) 第5回研究会の内容検討（初校のチェック）
- 4) ハンドブックの構成検討（1・2章の台割案・デザイン案について説明、意見交換。3～5章のコンテンツ、参考文献、担当の検討など）
- 5) ハンドブックの仕様（部数、印刷費等）検討（内部ミーティング等で検討することとする）



第3回研究会

第4回研究会

◇日時：1月9日（水）16:00～19:00

◇出席者：11名

朝倉、青柴、野中、塩田、中村、長津、村谷、宮本、大澤、宮田、櫻井

◇議題

- 1) ハンドブックの内容検討（具体的な中身に入る最初の会。全体の構成を確認した後、章ごとに内容の説明、意見交換など）

第5回研究会

◇日時：2月5日（火）15:00～18:00

◇出席者：10名

朝倉、野中、塩田、中村、長津、村谷、宮本、大澤、宮田、櫻井

◇議題

- 1) 公開研究会（2月3日）の報告（「芸術」「包摂」などの用語の理解、使い方などについての再検討）
- 2) ハンドブックの内容検討（タイトル〔保留〕、イラストのスタイル、カラー、第4章の詳細検討など）



第5回研究会（文化庁の職員はインターネット電話サービスで参加）

第6回研究会

◇日時：2月13日（水）10:00～12:00

◇出席者：9名

朝倉、野中、塩田、中村、長津、村谷、大澤、宮田、櫻井

◇議題

- 1) 各章の見出しとダイジェスト
- 2) 第3章の内容検討（第2章と入れ替え）
- 3) タイトルの決定など

第7回研究会

◇日時：2月18日（月）10:00～12:00

◇出席者：7名

野中、中村、長津、村谷、宮本、宮田、櫻井

◇議題

- 1) ダイジェストの内容検討
- 2) 第4章の内容検討
- 3) 副題の決定など

※場所はいずれも九州大学大橋キャンパス

誰かの発芽の手助けを

大澤 寅雄（ニッセイ基礎研究所芸術文化プロジェクト室主任研究員）

この九州大学ソーシャルアートラボ（SAL）にアドバイザーとして関わらせてもらいながら、大学におけるアートマネジメントの専門的人材の育成のあり方を、深く考える機会に恵まれています。

大学という場所は、小学校、中学校、高校から連続する学びの場ですが、小、中、高校、大学という階段を、おおむね同じ年齢の人間と、おおむね同じ内容の教科書で学び、途中で個人によって進路が選択されるものの、個人が経験したことや未経験のことに大きな差はないのが現役学生の学びです。その一方で、この文化庁の事業は、対象者が異なります。つまり、通常のエデュケーションの連続性とは異なり、社会に開かれた人材育成の場として「非連続的な場」として設けられ、社会経験も知見や経験を活かしたい場も異なっている人たちが集まっています。

さらに、昨年度から九州大学が取り組んでいる「アートと社会包摂」というテーマは、急速に関心を集めていますが、個人の考え方や経験の違いによって、言葉の解釈や活動の目的や内容も大きく異なっています。標準的な研究成果や活動モデルはまだありません。その場合の人材育成に必要な「教

材」とはどのようなものか、ということが、今年度のSALの大きな問いであり、チャレンジでした。

数多くのインタビュー調査や、文化庁の皆様にもご参加いただいた研究会での熱心な議論により、「ハンドブック」というスタイルの教材開発にたどり着きました。これは、何らかの形で「アートと社会包摂」に関わることになる人々が、手軽に手に取って、自分自身の歩みを進めるための背中を押すような読み物です。ただし、決して「マニュアル」ではありません。アートにしても、社会包摂にしても、マニュアルで対処できることはほとんどないからです。

SALにとっては、このハンドブックを制作すること自体が、知見やノウハウの体系化やネットワークを往還的に実施することになりました。今後、さまざまな活動現場から、このハンドブックに対する感想、意見、提案などのフィードバックを受けながら、より「アートと社会包摂」を担う人材育成の一助になることを期待しています。そしてハンドブックを手にした人の「種」が「発芽」するときの手助けになることを、心から願っています。

「関係」をつくり出すアートの力

宮田 智史（NPO法人ドネルモ事務局長）

「障害のある人だとみられるのではなく、例えば〇〇さん、というようにまだ親しい間柄でない人からも名前と呼ばれるようになった」「家族や施設職員以外の知り合い、友達が増えた」。

この言葉は、アートを活動の中心にした障害者支援施設の方が、アートというアプローチを通じて起こった変化を語ってくださったものです。2018年1月から、文化庁と九州大学の「文化芸術による社会包摂のあり方」に関する共同研究に協力させてもらうようになり、本年度は、社会包摂につながる芸術活動の政策立案や企画運営に関わるハンドブックの制作を行ってきました。そうした中で、「名前を呼ばれる」「友達ができる」など、一見すると些細な変化のようにも思えることが、実はとても切実で、困難なことなのだと痛感しています。

障害や社会的排除というのは、人と人、人と社会の間にある、つまり関係の中にあります。だからこそ、その解消とは、関係性の中にある隔たりを解消して、共に生きていくことだということです。ただし、そうした関係性の作り方には、事前に決まったものを当てはめるといよりも、どういうしかたで関係性の回路を開くかを、その場その場の状況に

合わせて探っていくことが不可欠です。こうした営みはすぐれてアートの持つ強みなのではないでしょうか。

一方で、国や自治体においても、社会包摂につながる文化芸術に関する取り組みに注目が集まっています。ただし、予算を確保するためには効果を示す必要がありますが、施策がどのような効果をあげるのか、どんな指標で成果を測るのが妥当なのか、施策と成果の因果関係を十分に説明できるかなど、まだまだ手探りの状態だといえます。そうした現状において、EBPM（エビデンス・ベースド・ポリシー・メイキング。証拠に基づく政策立案）や社会的インパクト評価など、予算が限られる中で施策をより合理的に進めるためのさまざまな手法の導入が進められています。しかし、短絡的に費用対効果で施策が生まれ、評価されるようになると、どうしても数字として上がりにくい、「名前を呼ばれる」「友達ができる」といった日常の切実な変化を見落としてしまいかねません。

次年度は、社会包摂につながる芸術活動の評価に関する冊子の制作を予定しています。多くの市民に影響を及ぼすものである以上、どのような価値軸や手法を用いるのかを含めて、研究会のメンバーとともに慎重に議論に取り組んでいきたいと思っています。

公開ディスカッション

「アート活動を通じた共生社会の創造 今年度のプロジェクトを通して考える」

2月10日（日）

今年度実施した人材育成事業を振り返る公開研究会を行いました。会場となった大橋キャンパス デザインコモンには、募集定員を上回る皆さまにご来場いただき、多様な視点からテーマである「アートと社会包摂」について語り合いました。

研究会の始めは、3つの「実践講座」（九州北部豪雨災害復興支援プロジェクト、『演劇と社会包摂』制作実践講座、奥八女芸農プロジェクト）と「公開講座」「教材開発」について報告をしました。各プロジェクトを担当した教員・スタッフが、実施した内容に加え、キーとなる視点や課題点についてお話ししました。また、事業の協働団体より認定NPO法人ニコちゃんの会の井上直己さん、特例認定NPO法人山村塾の原愛子さんも登壇され、現場の視点からお話しいただきました。

中盤のミニワークショップは、報告を受けて参加者が考えたことや、もっと知りたいことを、担当教員・スタッフ・協働団体の方と共有できる時間とし、短い時間ながら大変盛り上がりしました。最後は、NPO法人ドネルモの宮田智史さんに進行いただき、教員4名が登壇して「アート」や「社会包摂」、また、次年度の事業目標となる「評価」のあり方に関し考えを深める時間となりました。

参加者：34名 時間：13:30～16:30（13:00開場） 場所：九州大学大橋キャンパス デザインコモン2階 参加費：無料
スタッフ：梶山 尚子（SALスタッフ）
UDトーク：山崎 なずな（九州大学教育学部）、川上 里以菜・墨田 知世（九州大学芸術工学部）
協力：九州大学キャンパスライフ・健康支援センター インクルージョン支援推進室



登壇者

井上 直己（認定NPO法人ニコちゃんの会スタッフ）
原 愛子（特例認定NPO法人山村塾スタッフ）
宮田 智史（NPO法人ドネルモ事務局長）
尾本 章（SAL教員）

中村 美亜（SAL教員）
朝廣 和夫（SAL教員）
知足 美加子（SAL教員）
長津 結一郎（SAL教員）
村谷 つかさ（SALスタッフ）
宮本 聡（SALスタッフ）
白水 祐樹（SALスタッフ）



撮影（このページすべて）：長野 聡史

平成30年度事業フライヤー一覧



1



2



3



4



5



6



7



8



9



10



11



12

実践講座

〈九州北部豪雨災害復興支援プロジェクト〉

- 1 「黒川復興ガーデンとバイオアート—英彦山修験道と禪に習う—」復興支援のための視察ツアー 参加者募集
- 2 「黒川復興ガーデンとバイオアート—英彦山修験道と禪に習う—」復興の庭 創造のための学びと実践 参加者募集

〈「演劇と社会包摂」制作実践講座〉

- 3 多様性から生まれる舞台 舞台制作インターンシップ生募集！
- 4 フォーラム わたしたちの舞台はどこにある？

〈奥八女芸農プロジェクト〉

- 5 奥八女芸農学校 受講生募集中

公開講座

- 6 「障がい者アート」という言葉の背後にあるもの ドキュメンタリー映像作品「地蔵とリビドー」上映&トークセッション
- 7 「障がい者アート」の可能性 in 香港 i-dArtのユニークな思想と実践
- 8 兼子裕代写真展「GARDEN PROJECT 光と土—持続する希望のために—」

教材開発

- 9 日本文化政策学会第12回年次研究大会 社会デザインとしての文化政策（※公開シンポジウムでフォーラムを実施）
- 10 九州大学ソーシャルアートラボ トークイベント in 大阪 「アートと社会包摂 ソーシャルアートってどんなもの？」
- 11 九州大学ソーシャルアートラボ 公開研究会 座談会 表現、記憶、コミュニティ

公開ディスカッション

- 12 「アート活動を通じた共生社会の創造」今年度のプロジェクトを通して考える

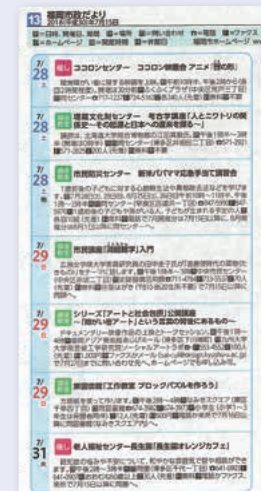
各フライヤーのデザイン

- 1=大村 政之（図案考案クルール）
- 2、5~9、12=田中 里佳
- 3~4=館 紗也子（superlap, Inc.）
- 10=西田 優子（遊覧船グラフィック）
- 11=長末 香織

メディア掲載



1



2



3



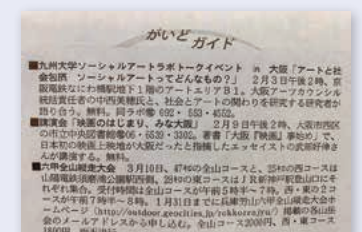
4



5



6



7



8

1. 平成30年7月7日
西日本新聞
支えるには九州豪雨
記憶共有「わがごと」に
※九州北部豪雨災害復興支援プロジェクト

2. 平成30年7月15日
福岡市政だより
イベント案内
※公開講座

3. 平成30年7月21日
毎日新聞 朝刊 福岡版
「障がい者アート」言葉の背後には
福岡アジア美術館で29日公開講座
ドキュメンタリー上映、トークイベント
※公開講座

4. 平成30年10月6日
西日本新聞 朝刊 筑後版
八女市・笠原地区で演出家の武田さん
民俗芸能創作 新たに
1ヵ月 住民に歴史聞き取り
※奥八女芸農プロジェクト

5. 平成30年10月22日
毎日新聞 朝刊 福岡版
アートの力で復興支援
地域住民と協力 庭園を計画
※九州北部豪雨災害復興支援プロジェクト

6. 平成30年12月17日
朝日新聞 夕刊
メロスは走る 車いすで
脳性まひなど男女6人主演
※「演劇と社会包摂」制作実践講座

7. 平成31年1月26日
日本経済新聞 大阪版
がいどガイド
※教材開発

8. 平成31年3月20日
朝日新聞出版 アサヒカメラ4月号
GARELLY GUIDE 写真展ガイド
兼子裕代「GARDEN PROJECT
光と土 持続する希望のために」
※公開講座

おわりに

九州大学ソーシャルアートラボでは「アートと社会包摂」をテーマに、アートマネジメント人材育成事業に3カ年計画で取り組んでいます。初年度にあたる今年度は、実践講座・公開講座・教材開発を柱とした事業に取り組んできました。

2017年に発生した平成29年7月九州北部豪雨の被災地の方々や環境に寄り添い、復興に寄与することを目指した「九州北部豪雨災害復興支援プロジェクト」は、九州大学内外のさまざまなグループとの協働で現在も精力的に進行しています。決して単発的にならず、息の長い取り組みとする覚悟が必要だと改めて感じています。「演劇と社会包摂」制作実践講座は、福岡市の事業としての位置づけのもとで、多くの方にご参加いただき、舞台制作実習、そして実際の公演では、大いなる熱気を感じる舞台が創られていました。八女の皆様にお世話になりながら継続している事業は「奥八女芸農プロジェクト」として実践的な持続可能性を探りながら確実に進化を続けている、ソーシャルアートラボの定番の取り組みの一つです。

これらの取り組みで得られた「成果」を、いかに見える化して普遍性を抽出し、多くの人々がそれぞれで取り組むきっかけになるような有効なものとして再編集するか、学術的な視点からの整理は、大学が取り組むべき重要な課題です。これはハンドブックという形で今年度と次年度に渡って結実させていきたいと思っています。

また、今年度は日本文化政策学会の年次研究大会が九州大学で開催される機を捉えて、公開フォーラムも開催されました。この他国内外のゲストを招いた講演、講座、ミーティングなど、本報告書に記載のように、多くの事業に取り組ませていただきました。

本報告書からは離れますが、ソーシャルアートラボでは、これ以外にも民間の財団から補助をいただいて、海をテーマにした作品制作・公演も行いました。昨年までの人材育成事業が形を変えて発展しているものです。

このように幅広い形で事業を推進でき、皆様との連携が叶えられたということに対して、まずはご関係の皆様にご心より感謝申し上げたいと思います。同時に、ソーシャルアートラボが、社会と大学の間で、アートや社会包摂、災害復興など、さまざまな切り口での連携の窓口となれる可能性を示せたのではないかと、少しの自負も感じます(担当の教員の皆さん、スタッフの皆さん、本当にお疲れ様でした)。

今後とも、地に足をつけた活動を続けたいと思います。どうぞ引き続きご指導を賜りますよう、お願い申し上げます。

尾本章 (SAL教員・ラボ長)

九州大学ソーシャルアートラボ

ラボ長

尾本章 (コミュニケーションデザイン科学部門 教授、応用音響工学)

人材育成グループ

[構成教員]

中村 美亜 (コミュニケーションデザイン科学部門 准教授、芸術社会学) 〈グループ長、副ラボ長〉

尾本章 (コミュニケーションデザイン科学部門 教授、応用音響工学)

知足 美加子 (コンテンツ・クリエイティブデザイン部門 准教授、彫刻)

朝廣 和夫 (環境デザイン部門 准教授、緑地保全学)

長津 結一郎 (コミュニケーションデザイン科学部門 助教、アートマネジメント)

[アドバイザー]

大澤 寅雄 (ニッセイ基礎研究所 芸術文化プロジェクト室 主任研究員)

[事務局スタッフ]

村谷 つかさ (学術研究員)

有馬 恵子 (テクニカルスタッフ) ※2018年8月まで

白水 祐樹 (テクニカルスタッフ)

宮本 聡 (テクニカルスタッフ)

梶山 尚子 (事務補佐員) ※2018年11月より

事業助成

平成30年度 文化庁 大学における文化芸術推進事業

事業共催

公益財団法人福岡市文化芸術振興財団

共星の里

特例認定NPO法人山村塾

NPO法人ドネルモ

認定NPO法人ニコちゃんの会

事業後援

日本アートマネジメント学会九州部会

アート活動を通した“共に生きる社会”の創造

九州大学ソーシャルアートラボ アートマネジメント人材育成事業
平成30年度 活動報告書

2019年3月29日発行

編集 木下 貴子 (CXB)、中村 美亜、長津 結一郎

執筆 中村 美亜、長津 結一郎、村谷 つかさ、木下 貴子 (CXB)
朝廣 和夫、漆山 阿弥、大澤 寅雄、小森 耕太、白水 祐樹、菅原 力、知足 美加子、
宮田 智史、宮本 聡

写真 渭東 節江、兼子 裕代、特例認定NPO法人山村塾、富永 亜紀子、知足 美加子、長野 聡史、
西村 翼、認定NPO法人ニコちゃんの会、松浦 ちひろ、427FOTO、
Ken Leung Hung Albert、Ku Sun Shan、九州大学ソーシャルアートラボ

デザイン 大村 政之 (図案考案クルール)

発行 九州大学大学院芸術工学研究院附属ソーシャルアートラボ
〒815-8540 福岡県福岡市南区塩原4-9-1
九州大学大橋キャンパス多次元デザイン実験棟 ソーシャルアートラボ事務局
TEL&FAX: 092-553-4552
E-mail: sal-cul@design.kyushu-u.ac.jp
URL: http://www.sal.design.kyushu-u.ac.jp

印刷所 正光印刷株式会社

©2019九州大学ソーシャルアートラボ

